

《公開シンポジウム 2026-① (月例サロン通算 354 回) 報告》

日本サッカー130年目の挑戦

SAMURAI BLUE の恩人 スコットランドも応援しよう！

- 名 称 : W 杯直前企画 関西大学×サロン 2002 共催シンポジウム
日本サッカー130年目の挑戦
—SAMURAI BLUE の恩人 スコットランドも応援しよう！
- 主 催 : 特定非営利活動法人サロン 2002
- 共 催 : 関西大学体育会サッカー部
- 後 援 : 関西大学東京センター、筑波大学蹴球部同窓会茗友サッカークラブ、
(一社) 子ども未来・スポーツ社会文化研究所 (FCSSC)
- 日 時 : 2026 (令和 8) 年 5 月 2 日 (土) 14:00~16:30 (13:30 受付開始)
- 会 場 : 関西大学東京センター (JR 東京駅日本橋口サピアタワー9F) & オンライン (Zoom)
- 登壇者 : 後藤 健生 (サッカージャーナリスト/元関西大学客員教授)
黒田 勇 (関西大学名誉教授)
※中塚 義実 (特定非営利活動法人サロン 2002 理事長) ※コーディネーター
- 参加費 : 1,000 円 (サロン 2002 ファミリーと学生は無料)
- 参加申込 : Peatix」よりお申し込みください ⇒ <https://peatix.com/event/4931737/>
- 報告書作成 : 中塚義実

注) 写真・スライドは、各発表については発表者が、その他は NPO サロン 2002 が提供

<目次>

オープニング	4
第1部. 日本サッカーの130年とスコットランド	5
1. 130年目の挑戦—東京高師蹴球部の創部と大戦前の日本サッカー (中塚義実)	5
2. スコットランド流パス・サッカーの日本への伝播 (後藤健生)	10
3. スコットランドのサッカー文化とスターリング・アルビオンの記憶 (黒田勇)	17
第2部. FIFAワールドカップ2026を語る	26
1. 日本代表の英国遠征	26
2. FIFAワールドカップ2026への期待と展望	33

【キーワード】 FIFA ワールドカップ、2026W 杯、スコットランド、ショートパス、パスサッカー、サッカー史、筑波大学蹴球部、関西大学体育会サッカー部、FCSSC、中村覚之助、チャー・ディン、黒田勇、後藤健生、中塚義実、武藤文雄、小島裕範、NPO サロン 2002

公開シンポジウム 2026-①参加者 計 53 名(敬称略)

注) 名前の前の記号は、◎NPOサロン2002会員、○会員外のサロンファミリー、無印はサロンファミリー外

【会場での対面参加】(38名)

井上俊也(大妻女子大学)、江口波輝(明治大学大学院教養デザイン研究科博士前期課程2年)、岡本亜希子、◎奥山純一(クーディップ株式会社)、小野典代(Unaffiliated)、尾山真一、◎木田圭亮(聖マリアンナ医科大学)、黒田勇(関西大学名誉教授)、○桑村裕次(日本サッカー史研究会)、小石巖(関西大学サッカー部OB会幹事/全国通訳案内士(英語))、後藤健生(サッカージャーナリスト/元関西大学客員教授)、小堀俊一(日本サッカー史研究会)、◎小堀徹(サッカー愛好家)、酒井康太郎(クレジオ・パートナーズ株式会社)、佐塚元章(フリーランス)、佐野慎輔、島田達人(新潟経営大学)、須佐徹太郎(阪南大学サッカー部元監督)、○鈴木崇正(編集者・記者)、瀬野純三、鷹巣啓二(関西大学校友会組織部)、高橋基之、千谷順一郎(都立飛鳥高校)、寺田進志(平成国際大学)、◎中塚義実(NPO法人サロン2002理事長)、野田智浩(MIフォース株式会社)、野村朋美、橋間司、蜂谷冬陽(日本体育大学大学院博士後期課程1年)、武藤文雄(サッカー講釈師)、武藤洋子、○守屋佐栄(無職でSfidaのサポ)、◎守屋俊秀(世田谷サッカー協会)、保原幸夫、山内博之(日本サッカー史研究会)、山中伸高、山本浩、ほか1名

【オンライン参加】(15名)

○安藤裕一(株式会社GMSSヒューマンラボ)、伊藤勝朗、○木村康子、◎小池靖(株式会社バイタル)、◎小島裕範(世界の時間を止めた男/事業再生コンサルタント)、◎笹原勉(日揮ホールディングス台湾事務所)、杉本厚夫(子ども未来・スポーツ社会文化研究所)、○高平豊明(サッカー文化フォーラム)、◎橋和徳(富山県スポーツ振興課)、○田中俊也(三日市整形外科)、○張寿山(明治大学/スフィード)、中村崇(那智勝浦町)、○長野いつき(音楽家) ほか2名

<主催・共催団体紹介>

【特定非営利活動法人サロン 2002】

特定非営利活動法人サロン 2002 は、スポーツを通しての“ゆたかなくらしづくり”を“志”とするNPOです。

このNPOが運営するサロン 2002 ファミリーは、全国各地・世界各国にいる約100名の“同志”のつながりです。学校関係者、スポーツの指導者・研究者、メディア関係者、クラブ運営に携わる人や競技団体関係者、フットサルや草サッカーなど生涯スポーツのプレーヤー、サポーターやボランティア、スポーツ行政に携わる自治体関係者、医者や弁護士、アーティスト、そして学生など、多種多様です。さまざまな角度からスポーツをはじめとする“遊び”に携わり、“志”の実現を目指して活動する人で構成されるネットワークです。

NPO サロン 2002 の主たる事業は、1997年度より毎月行われる月例サロンの開催と、ホームページでの情報発信です。月例サロンの拡大版の公開シンポジウムは2001年度よりほぼ毎年行われ、人と情報の行き交う場として定着しています。毎年1月には長野県千曲市で「U-18 フットサルリーグチャンピオンズカップ」を開催し、U-18 フットサルの発展に力を注いでいます。

時空を超えた仲間の輪を広げながら、“志”の実現に向けて取り組んでいます。“志”に賛同される方はどなたでもサロン 2002 ファミリーになることができます。詳細はホームページをご覧ください。

<https://www.salon2002.net>



【関西大学体育会サッカー部】

大正10(1921)年に創部した伝統あるクラブであり、これまでに数々のタイトル奪取と優秀な人材を輩出してきました。創部4年目の1925年、20名で中国上海に遠征したのが、単独チームとして日本初の海外遠征とされています。近年はJリーグでプロとして活躍する選手も出てきており、JFL、各地域社会人チームなど全国、多方面でOBが活躍しています。



現在は選手、スタッフあわせて約200名の部員が、TOPチーム、関大FC2008、関大REDGROW、関大SOLEO、関大女子の5つのチームに分かれて活動しています。

クラブの目的(ビジョン)として、『価値を共創し、“勝ち”で示す』。「関西大学体育会サッカー部の価値を創造し、結果と姿勢で示す。そして、関わる全ての人とともに価値を高めるチームを目指す」ことを掲げています。

ピッチ内外での「日本一」、そのための二つの基盤「サッカーとプロジェクト」を活動の中心に据え、人間力の向上を目指しています。

<https://kufc1921football.com/>

<開催趣旨>

英国発祥の近代スポーツ、サッカーをいち早く取り入れ、「赴任地にゴールポストを」を合言葉に全国に広めた東京高等師範学校蹴球部の創部から130年が経過します。文献からしかサッカーを知ることができなかつた時代から、実際のゲームを体験し、試行錯誤を繰り返し、外国人指導者に学び、海外に挑戦し、長い年月をかけて普及と強化を進めてきました。

戦前の日本サッカーの飛躍には、ビルマ(ミャンマー)からの留学生、チョー・ディン氏の全国行脚がありました。「スコットランド人からサッカーを教わった」という彼が伝えたのは、今につながるパスサッカーでした。

1964年の東京オリンピックで招聘されたD.クラマー氏の提言を受けて日本サッカーリーグが1965年に発足します。Jリーグにつながる全国リーグです。その翌年、今から60年前の1966年に、日本代表は初めて海外のプロチーム、スコットランドの「スターリング・アルビオン」と対戦します。アマチュア選手で構成された当時の日本代表はプロの厳しさと学びを得て、1968年にはメキシコ五輪で銅メダルを獲得します。

そうした学びの歴史を経て、今では多くの日本人プレーヤーがスコットランドをはじめ、ヨーロッパを中心に海外で活躍し、日本代表はワールドカップの常連国となりました。一方、スコットランドは28年ぶりにFIFAワールドカップに出場。これに導く劇的ゴールを決めたのは、幼少期に憧れのセルティック中村俊輔選手からスパイクをもらってプロ選手を志したキーラン・ティアニー選手です。

スコットランドと日本とは、昔からサッカーにおいて深い縁とゆかりがあるのです。

いよいよ本年2026年6月には、日本が8大会連続出場となるFIFAワールドカップが開催されます。「目標は世界一」と公言する日本代表の躍進の秘密はどこにあるのか。長年にわたりスコットランドと日本のサッカーに注目してきた登壇者らと、スコットランドからの「学び」を中心に、FIFAワールドカップの展望、そして日本とゆかりあるスコットランド現代表の応援を含めて、楽しくそして熱く語り合いたいと思います。

I. オープニング

中塚：皆さんこんにちは。「日本サッカー130年目の挑戦—SAMURAI BLUEの恩人スコットランドも応援しよう！」という大変マニアックなシンポジウムにお越しいただき、誠にありがとうございます。主催するNPOサロン2002理事長の中塚義実と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

今回はNPOサロン2002主催、関西大学サッカー一部共催ということで、東京駅直結の素晴らしい会場をご提供いただきました。はじめに関西大学サッカー部OB会の元副会長で、東京支部長をなさっておられた小石巖さんから開会のご挨拶をいただきます。小石さん、どうぞよろしくお願い致します。

小石：こんにちは。ご紹介に預かりました小石と申します。この3月までOB会副会長兼東京支部長ということで、15年ほどこちらでOB会活動をさせてもらいました。3月の総会でめでたく後輩に引き継ぐことができ、いまほっとしているところです。

ワールドカップに関しては1994年のアメリカ大会の頃、仕事でシカゴにいましたので、開幕戦含め4試合を観戦しました。「ドーハの悲劇」がなければ日本代表が来たはずのワールドカップでした。

テーマに沿って皆さんと勉強し、交流も深めていければなと思います。よろしくお願い致します。

中塚：ありがとうございました。では本日のシンポジウムの趣旨、内容、登壇者についてご紹介させていただきます。

今日のシンポジウムは二部構成です。第1部は「日本サッカーの130年とスコットランド」です。冒頭、「130年」のところを話させていただきます。

去年3月末まで、私は東京都内の筑波大学附属高校で保健体育科教諭、サッカー一部顧問を38年間、務めておりました。筑波大学蹴球部のOBです。部の創部から今年が130年です。日本サッカーの“宗家”について話をさせていただきます。

演者①は、皆さんおなじみのサッカージャーナリスト、後藤健生さんです。日本とスコットランドの関係についてたっぷりとお話しいただきます。

演者②は、このシンポジウムの発端となる関西大学名誉教授の黒田勇さんです。NPOサロン2002では年2回の公開シンポジウムを開いておりますが、2025年12月21日、前年に99歳で亡くなられた「賀川浩さんを語ろう！」というシンポジウムを開きました。世界最高齢サッカージャーナリストとしてFIFA会長賞を受賞された方です。シンポジウム後の懇親会で、黒田さんが「スコットランドのことを取り上げよう」と言ってくださったのが今回の発端となります。

第1部は私を含めた3名でちょっと濃い話をさせていただき、休憩を挟んだ第2部で「FIFAワールドカップ2026を語る」ことにします。3月の英国遠征に行かれた方が、黒田さんはじめ何名かいらっしゃいます。話題提供者からコメントをいただきながら、FIFAワールドカップ2026の期待と展望を語り合おうと思います。第2部からはスコッチウイスキーを軽くいただきながら進めていくつもりです。ざっくばらんな会ですので、懇親会も含めてお楽しみいただければと思います。

お手許に資料が配布されています。また、今日はちょっと暑いので、うちわも配らせていただきました。日本サッカーの“始祖”の名を冠した「中村覚之助杯」のうちわです。お持ち帰りください。

<p style="text-align: center;">【シンポジウム 14:00～16:30】</p> <p>第1部. 日本サッカーの130年とスコットランド</p> <p>オープニング 中塚 義実(NPOサロン2002理事長)</p> <p>演者① 後藤 健生(サッカージャーナリスト)</p> <p>演者② 黒田 勇(関西大学名誉教授)</p> <p>第2部. FIFAワールドカップ2026を語る</p> <p>1. 日本代表の英国遠征</p> <p>話題提供者① 照屋 健</p> <p>話題提供者② 武藤 文雄</p> <p>2. FIFAワールドカップ2026への期待と展望</p> <p>話題提供者③ 小島 裕範</p> <p style="text-align: center;">【懇親会 16:45～18:45】</p>
--

第1部. 日本サッカーの130年とスコットランド

1. 「130年目の挑戦」—東京高師蹴球部の創部と大戦前の日本サッカー（中塚義実）

1) 日本サッカーのはじまりと東京高等師範学校

ここにいらっしゃる方には、この絵をご覧になったことがある方も多いと思います。1874年にロンドンで紹介された A Football Match at

Yokohama, Japan です。後方に富士山が見えるところで、押しくらまんじゅうしている外国人を和服姿の日本人が取り囲んでいます。外人さんたち、一体何してるんやろと。開国し、海外から新しい文化やこういった人々がやってきました。外来文化の一つとしてフットボールも紹介された。そんな状況です。

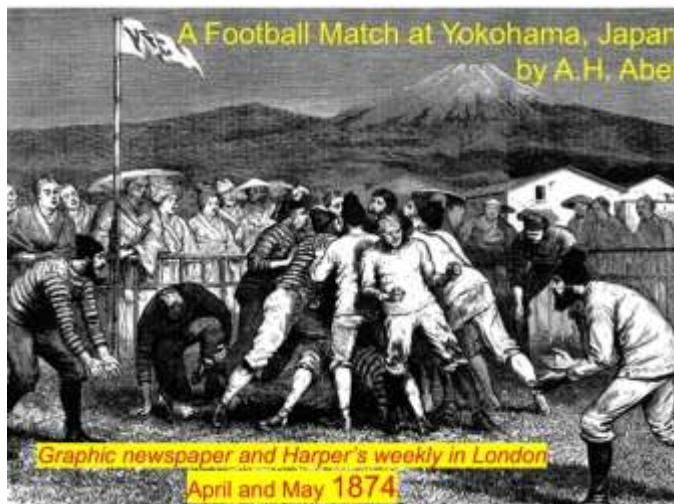
日本へのフットボールの伝来について、広く知られているところではありますが、外国人の居留地、例えば神戸、例えば横浜で、外国人のスポーツクラブが生まれます。日本初のスポーツクラブは明治元年にできました。

1872年に野球伝来、その翌年にサッカー伝来となっていますが、野球の方はともかく、サッカーの方は必ずしもここから広がっていくことはありませんでした。

広がっていったのは学校を通してです。教育制度が整えられ、体操の授業が始まります。しかしそれを教える先生はまだいません。そこで体操を教える先生を育てる学校として体操伝習所ができます。通訳だった坪井玄道、後に主任となりますが、この方が、体操だけでなく遊戯を紹介するわけです。体操伝習所は、高等師範の体育専修科に組み込まれます。いまの筑波大学体育専門学群のはじまりですね。

この学校に嘉納治五郎が校長として着任するのが1893年です。柔道の創始者、日本で最初のIOC委員、1912年のストックホルム・オリンピックへの選手団派遣母体としての大日本体育協会、いまの日本スポーツ協会創設、そして多くの留学生を受け入れた国際人でもありました。

この方は、東京高師の校長を長い間務められ、スポーツの教育的意義を重視した方です。東京高師の卒業生は全国の旧制中学校や師範学校に赴任します。赴任先では、どこの



日本へのフットボールの伝来

- ◆外国人居留地に“クラブ”が生まれる
1868(明治元)年 YC&AC(横浜外人クラブ)
1870(明治3)年 KR&AC(神戸外人クラブ)
- ◆軍人や教師によって近代スポーツが紹介
1872(明治5)年 野球伝来
1873(明治6)年 サッカー伝来
- ◆教育制度が整えられ、「体操」が導入される
「体操伝習所」(1878~1885)「遊戯」紹介
1886 高等師範学校体育専修科に改組
1893 高等師範学校に嘉納治五郎校長着任

1896(明治29)年3月「運動会」設立

柔道部、撃剣及び銃槍部、弓技部、器械体操部、ローンテニス部、フットボール部、ベースボール部、自転車部の八部に分ち、生徒は其の一部若しくは数部に入りて、毎日三十分以上必ず所属の部について運動をすること

ACミラン・FCバルセロナ(ともに1899年創設)より歴史あり!

1901(明治34)年10月「校友会」に改組

1902(明治35)年4月 坪井玄道が欧米視察から帰国
※この年から東京高等師範学校(東京高師)

1903(明治36)年4月 大塚窪町に移転

学校でも水泳の授業をやりますし、どこの学校でも運動会や林間学校、臨海学校をやり、部活動をはじめます。そういう意味で、東京高師、いまの筑波大学が起点となったということです。

ここで「130年」という数字が出てきます。1896年3月の「運動会」設立です。

高等師範の卒業生が赴任する師範学校や旧制中学には、やんちゃな生徒が大勢います。そういう年代だし時代です。だから先生は、勉強だけでできていてもダメだ、ちゃんと体を鍛えなさいということで、柔道部以下8つの部を設け、生徒はその一部、もしくは数部に入って毎日三十分以上運動することとされていました。その中の一つに「フットボール」があるわけです。フットボールですね。これが東京高師、いまの筑波大学蹴球部の創部です。1899年創設のACミランやFCバルセロナよりも歴史があるわけです。

3月末に創部130年の祝賀パーティがあり、私も行ってきました。同じ年にできたベースボール部、野球部も、今年130周年のイベントをすると聞いています。

2) 日本サッカーの“始祖”中村覚之助と東京高師蹴球部

ただ、実質的にメンバーシップが確立して部活動が始まったのは、20世紀に入って「校友会」が生まれたときからです。従来の運動会に、寄宿舎とか談話部とかが加わった組織に改組します。ちょうどいまのお茶ノ水駅前から茗荷谷駅前に移転するぐらいのタイミングです。

そのころ坪井玄道が欧米視察から帰国します。蹴球部初代部長です。広島にも高等師範ができたので、校名は東京高等師範学校となります。

こんな記録が残っています。「中村君以下部員一同整地に努め」…中村君を中心にグラウンド作りから始めたという話です。また「中村君から蹴球に関する運動規約を習って実地訓練を開始した」と。いまと違って映像はありません。サッカーをプレーしている人も周りにはいません。海外の文献をたよりに想像力を働かせ、中村君を中心に本格的な練習を始めたのが1903年のことです。茗荷谷駅前にいまも広がる筑波大学東京キャンパスがその場所です。文京区スポーツセンターとその前に広がるグラウンドも、元々東京高師の、戦後は東京教育大学の敷地でした。

初代主将の中村覚之助と、彼が著した日本で最初のサッカー専門書です。坪井玄道が持ち帰った

4冊の本をもとにしていますが、単なる訳本でなく、自分たちがこれから取り組むうえでの心構えなども書かれた書物です。今日はその復刻本を持ってきています。あとで手に取って見てください。

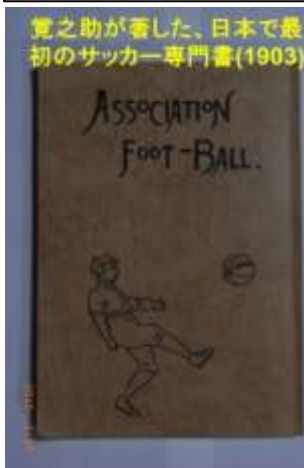
練習はしますが、対外試合はまだやったことがありません。そこで試合を申し込みます。当時、サッカーをやっていたのは外国人だけなので、申し込んだ相手は横浜の外人倶楽部でした。

結果は0-9の完敗。これが日露戦争開戦直前の1904年2月6日のことです。

覚之助は、後列右から二番目の制服姿の人です。主将ですが、この試合には出ていません。3月末で卒業する覚之助は、後輩のためにこの試合を企画し、翌日に神田の写真館で写真を撮り、裏面にメッ

1903(明治36)年4月 大塚へ移転

「全生徒は35年5月、一足先にできた寄宿舎に入舎して、そこから1年間お茶の水に通った。大塚の新運動場の予定地は雑木雑草に埋められていたが、**中村君以下部員一同整地に努め**、蹴球のフィールドに棕櫚縄(しゅろなわ)を張りめぐらして石灰線の代用としたり、ゴールを建てたりした。一方**中村君から蹴球に関する運動規約を習って実地訓練を開始した**」(堀桑吉氏の寄稿より)



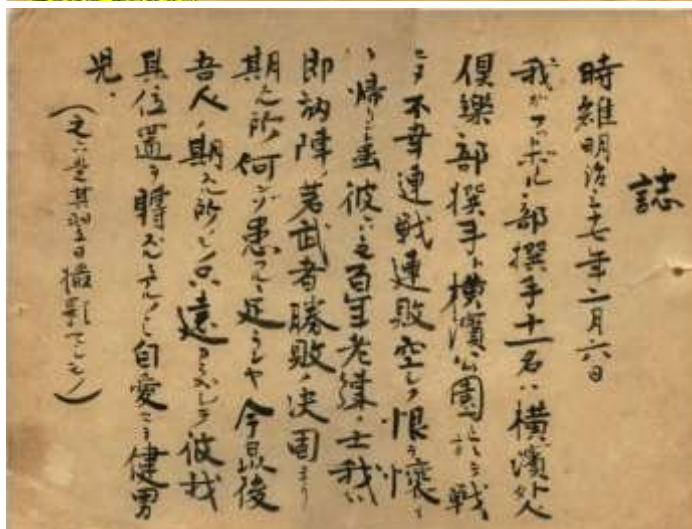
セージを残しています。簡単に言うと、俺たちは素人だからボロ負けしたけど、これを起点にこれから頑張るぞという決意表明です。

今日も那智勝浦町から、オンラインで参加された方がおられます。皆さんにお配りしたうちわは、那智勝浦町名誉町民となった中務覚之助を知ってもらおうと、去年から始まった少年サッカー大会、「中村覚之助杯」で参加者に配布されたものです。

初代主将の中村覚之助は、和歌山師範を出て地元の小学校の先生になりましたが、22歳で東京高師の博物科に入学します。そこで蹴球の本を著し、日本人初の公式試合を実施します。卒業後は都内の女学校に1年務めた後、清国、中国の学校に派遣されますが、28歳と若くして亡くなりました。この方のことがあまり知られていないのはそのためかと思われます。

日本サッカーの“始祖”、覚之助のことを、「130年目の挑戦」のはじまりの物語としてももう少し共有しておきたいと思ひます。

覚之助の生家には、いまでも当時のノートや手紙などが残っています。たいへんな勉強家だったことがわかります。解剖のスケッチなどは、いまの学生だったら写真や動画を撮っておしまいでしょうが、しっかり観察して描いていることがわかります。卒業証書や、校友会役員として活躍したこと、水泳初段を得たことが、嘉納校長名の証書でわかります。学業もスポーツも優れ、リーダーシップを備えた人物であることがわかります。



中村覚之助の略歴	中村覚之助の功績
<ul style="list-style-type: none"> ・明治11(1878)年5月 和歌山県那智勝浦町で生まれる ・明治32(1899)年3月 和歌山師範学校卒業 <li style="padding-left: 20px;">4月 宇久井高等小学校にて教師になる ・明治33(1900)年4月 高等師範学校博物科入学(22歳) ・明治36(1903)年10月 『アソシエーション・フットボール』出版 <li style="padding-left: 20px;">※東京高師 大塚窪町に移転(1903年4月) ・明治37(1904)年2月6日 東京高師vsYC&AC <li style="padding-left: 20px;">3月 東京高等師範学校博物科卒業 <li style="padding-left: 20px;">4月 東京府立第一高等女学校(現白鷗高)着任 ・明治38(1905)年 清国山東省済南師範学校に着任 ・明治39(1906)年7月3日 逝去(28歳) 	<ul style="list-style-type: none"> ◆東京高師蹴球部は“日本サッカーの宗家”である！ <li style="padding-left: 20px;">「赴任した学校にゴールポストを立てよう！」 <li style="padding-left: 20px;">学校を基盤とする日本サッカーの発展に貢献した <li style="padding-left: 20px;">その開祖は中村覚之助 ◆中村覚之助の功績 ・日本ではじめてサッカーの本を編集・著作・出版した <li style="padding-left: 20px;">明治36(1903)年 『アソシエーション・フットボール』 ・日本ではじめてサッカーの対外試合を企画・実行した <li style="padding-left: 20px;">明治37(1904)年 東京高等師範学校 0-9 YC&AC <li style="color: red; text-align: center;">サッカーを日本にはじめて全面的・本格的・系統的に紹介 <li style="color: red; text-align: center;">日本サッカーの“始祖”

注) 本報告ではスライドは割愛。2026年3月31日 公開サロン報告を参照されたい。

“中村覚之助杯”報告ー日本サッカーの“始祖”の名を冠した少年サッカー大会

https://www.salon2002.net/src/pdf/monthly_report/2026/2026-3.pdf

3) 中村覚之助の後輩たちによるサッカーの全国展開

覚之助の後輩たちが全国の旧制中学や師範学校に赴任し、サッカーを全国に広めました。蹴球部員でなくても、東京高師を卒業して校長先生になった方々が、各学校でサッカーを校技と位置付け奨励します。

また1917年の極東選手権に出場した最初の日本代表は東京高師のメンバーでした。しかし中国に0-5、フィリピンに2-15とボロ負けです。これではいかんということで、各地の新聞社の支援を得て、1918年1~2月に首都圏、東海、関西でユース年代の蹴球大会が開かれました。関西の大会が、いまの全国高校選手権につながります。首都圏で行われた大会は、東京高師関係者を中心に盛大に企画・運営されました。皇族や各国の大使も観戦に来られます。英国大使も来られました。日英同盟の時代です。

そしてフットボールの名家、イングランドのFAから銀杯が届きます。受け取ったのは、大日本体育協会の嘉納治五郎会長で、「日本のチャンピオンに渡してくれ」ということです。

しかし日本一を決める大会はもちろんまだないし、その組織もありません。東京高師に漢文の先生として戻って蹴球部長となっていた内野台嶺を中心に大日本蹴球協会が組織され、1921年に全日本選手権が始まります。

東京高師の卒業後は全国各地へ!

赤木愛太郎は明治33(1900)年3月卒

明37(1904) 中村 覚之助 → 清国山東省済南府師範学堂	伊藤長七はこの学年
明38(1905) 牧野 信寿 → 広島師範	「赴任地にゴールポスト!」を合言葉に、東京高師卒業生は全国にサッカーを広めた
明39(1906) 堀 桑吉 → 愛知第一師範	
明41(1908) 細木 志郎 → 埼玉師範	錦織兵三郎、成田千里はこの学年
明42(1909) 内野 台嶺 → 豊島師範 → 東京高師	
明42(1909) 落合 秀保 → 滋賀師範	「いだてん」金栗四三の同期生
明42(1909) 玉井 幸助 → 御影師範	
明44(1911) 松本 寛次 → 広島一中	
大 3(1914) 高橋 英治 → 刈谷中	
大 9(1920) 北村 春吉 → 静岡師範	
大10(1921) 和田 邦五郎 → 東京高師附属中	
大13(1924) 後藤 基胤 → 湘南中	

回	年 度	優勝	準優勝
1	大10 1921	東京蹴球団	御影蹴球団
2	大11 1922	名古屋蹴球団	広島高師
3	大12 1923	アストラクラブ	名古屋蹴球団
4	大13 1924	新成クラブ	三田御影蹴球クラブ
5	大14 1925	鶴城蹴球団	東京帝大
6	大15 1926	天大正天皇崩御のため中止	
7	昭2 1927	神戸一中クラブ	鶴城クラブ
8	昭3 1928	早大WMW	京都帝大
9	昭4 1929	関学クラブ	法政大学
10	昭5 1930	関学クラブ	慶応BFB
11	昭6 1931	東京帝大LB	英文学堂
12	昭7 1932	慶応クラブ	芳野クラブ
13	昭8 1933	東京OBクラブ	仙台サッカークラブ
14	昭9 1934	※極東選手権準備のため中止	
15	昭10 1935	全京城蹴球団	東京文理大学
16	昭11 1936	慶応BFB	豊成専門
17	昭12 1937	慶応大学	神戸商大
18	昭13 1938	早稲田大学	慶応大学
19	昭14 1939	慶応BFB	早稲田大学
20	昭15 1940	慶応BFB	早大WMW
21	昭16 1941	※戦争のため諸行事中止	
22	昭17 1942	※戦争のため諸行事中止	
23	昭18 1943	※戦争のため諸行事中止	
24	昭19 1944	※戦争のため諸行事中止	
25	昭20 1945	※戦争のため諸行事中止	

回	優勝
1	早稲田大
2	東京高師
3	東京帝大
4	東京帝大
5	東京帝大
6	東京帝大
7	東京帝大
8	東京帝大
9	慶應義塾
10	早稲田大
11	早稲田大-慶應義塾
12	早稲田大
13	早稲田大
14	慶應義塾
15	慶應義塾
16	慶應義塾
17	慶應義塾
18	早稲田大-東京帝大
19	東京帝大
20	東京帝大
21	東京帝大
22	東京帝大
23	東京帝大
24	東京帝大
25	東京帝大

回	年 度	優勝	準優勝
1	1917	御影師	明星義
2	1918	御影師	明星義
3	1919	御影師	鶴城師
4	1920	御影師	鶴城師
5	1921	御影師	神戸一中
6	1922	御影師	鶴城師
7	1923	御影師	京都師
8	1924	神戸一中	御影師
9	1925	御影師	広島一中
10	1926	中止	
11	1927	早大	広島一中
12	1928	御影師	平塚高
13	1929	神戸一中	広島師
14	1930	御影師	広島一中
15	1931	御影師	愛知一師
16	1932	神戸一中	青山師
17	1933	鶴城師	明星義
18	1934	中止	
19	1935	神戸一中	天王寺師
20	1936	広島一中	蕨中
21	1937	埼玉師	神戸一中
22	1938	神戸一中	滋賀師
23	1939	広島一中	聖隷中
24	1940	青成中	神戸三中
25	1941	※戦争のため中止	
26	1942	※戦争のため中止	
27	1943	中止	
28	1944	中止	
29	1945	中止	

4) 戦前のレベルアップに貢献したビルマからの留学生とスコットランド

この頃から各大学にサッカー部ができ、1924年からいまの関東大学リーグが始まります。第1回優勝は早稲田、第2回は東京高師、第3回からは東京帝大が6連覇します。東京帝大の中心選手は、旧制中学を出て旧制高校経由で帝大へ進む、いわゆるエリートの人たちです。日本における戦前のサッカーは、一部エリート層のスポーツでした。

そして、このあたりからスコットランドの影響がみえはじめます。日本サッカーが技術的に大きく進歩したのが、ビルマ、いまのミャンマーからの留学生、チャー・ディンさんの影響です。早稲田の優勝はチャー・ディンの技術指導の賜物ですし、1930年の極東選手権初優勝もその影響が大でした。

早稲田サッカーの創始者である鈴木重義さんは、東京高師附属中学の卒業生。私が長らく務めていた学校です。チャー・ディンの話は後藤さんのところから出てくると思いますが、私からはエピソードを一つ。旧制附属中 OB で元日本代表の春山泰雄氏の手記からの引用です。鈴木先輩が「チャー・ディンを私たちに紹介してくれた」と述べる春山さんはおよそ 100 年前の卒業生です。チャー・ディンが「大正 12 (1923) 年 8 月、蹴球の指導書 (How to Play Association Football) を出版した」ことと、本の中のモデルが、中学生だった私たちであることを紹介しています。この 1 ヶ月後が関東大震災です。留学先の学校で授業ができなくなり、おかげで、という大変ですが、チャー・ディンのサッカー指導の全国行脚が始まります。日本サッカーの技術レベルが飛躍的に向上したということです。

このチャー・ディンとスコットランドが関係しているようなんです。この部分は後藤さんのお話で。

1930 年のアジア初制覇のときのメンバーです。東京帝大の在校生や卒業生が中心ですが、東京高師附属中や神戸一中など、チャー・ディンの指導を受けてショートパス戦法が定着してきた世代が中心選手となっていることがわかります。

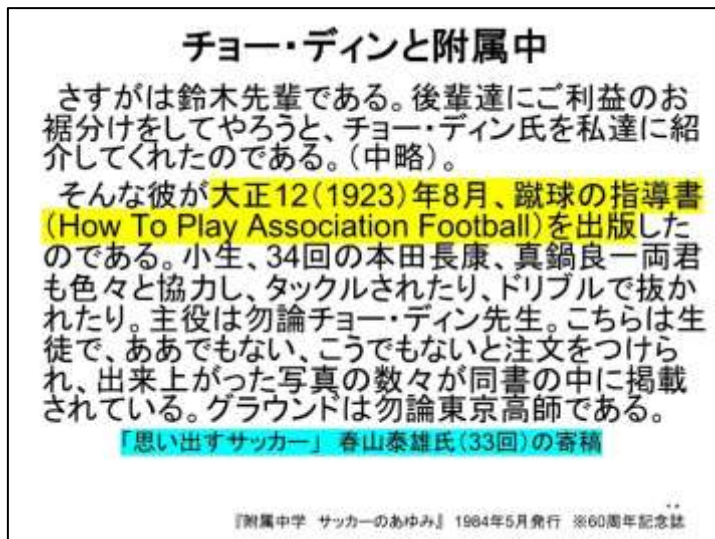
そしてこの翌年、JFA のシンボルマークが決まる。ヤタガラスのあれですね。

戦前唯一のオリンピック出場は、1936 年のベルリン大会です。チームの主将、竹内悌三さんはシベリア抑留で亡くなられますが、お嬢さんは石井幹子さんという世界的な照明デザイナー。2 人の弟はともに戦後、附属高校でサッカーをされました。父親が生前「2 人の息子には附属でサッカーをさせる」と言っておられ、それが遺言だったということです。

終戦翌年の 1946 年 5 月に、全日本選手権が復活します。東大 LB と神戸経済大が試合をして東大 LB が優勝しますが、前座で東京高師附属中と神戸一中が、旧制中学の日本一を決する試合をやり、高師附中が優勝します。両チームとも、チャー・ディン仕込みのショートパスサッカーです。元をたどればスコットランド仕込みの技術・戦術がつながっていたのではと思います。

というようにところを導入として、ここから SAMURAI BLUE の恩人、スコットランドとのつながりについて、本題に入っていきたいと思います。

後藤健生さん、よろしくお願ひします。



第9回極東選手権優勝メンバー

#	氏名	生年月日	出身中学	出身高校	出身大学	試合出場	
						7/19	20/21
監督	鈴木 重義	1902(明治35)年10月26日	東京高師附属中	早稲田高等学院	早稲田大	-	-
FW	春山 泰雄	1906(明治39)年4月4日	東京高師附属中	水戸高校	東京帝国大	○	○
	若林 竹雄	1907(明治40)年8月29日	神戸一中	松山高校	東京帝国大	▽	▽
	手島 志郎	1907(明治40)年2月26日	広島高師附属中	広島高校	東京帝国大	○	○
	藤島 秀雄	1910(明治43)年1月21日	東京高校専修科	東京高校	東京帝国大	○	○
	高山 忠雄	1904(明治37)年6月24日	神戸一中	第八高校	東京帝国大	○	○
	市橋 時三	1909(明治42)年6月9日	神戸一中	慶応大予科	慶応義塾大	△	△
HB	本田 長康		東京高師附属中	早稲田高等学院	早稲田大	▽	○
	竹腰 重丸	1906(明治39)年2月15日	大連一中	山口高校	東京帝国大	○	○
	野沢 正雄		広島高師附属中	広島高校	東京帝国大	○	○
FB	竹内 悌三	1908(明治42)年11月6日	東京府立五中	浦和高校	東京帝国大	○	○
	井出 多米夫	1908(明治42)年11月27日	静岡中	早稲田高等学院	早稲田大	△	△
	後藤 勲雄		関西学院中		関西学院大	○	○
GK	斎藤 才三	1908(明治42)年9月24日	桃山中		関西学院大	○	○
sub							
HB	西村 清		神戸一中	松山高校	京都帝国大		
	大町 篤				東京帝国大		
	杉村 正二郎	1907(明治40)年8月16日	天王寺中	早稲田高等学院	早稲田大		
FB	近藤 台五郎		東京高師附属中	水戸高校	東京帝国大		
	岸山 義夫			第八高校	東京帝国大		
GK	阿部 順二	1909(明治42)年1月27日	東京府立五中	浦和高校	東京帝国大		

注) 試合出場権は、○フル出場、▽途中退場(交代)、△途中出場

2. スコットランド流パス・サッカーの日本への伝播（後藤健生）

こんにちは。後藤でございます。私の方からはスコットランドのサッカーと、それが日本にどういう影響を与えたのかという話をさせていただきます。

私にとってスコットランドの初体験は、1974年に西ドイツ・ワールドカップを見に行った時です。開幕戦が、フランクフルトでのブラジル対ユーゴスラビア、翌日がシュツットガルトでポーランド対アルゼンチン、そして3日目にドルトムントでスコットランド対ザイールという試合を見ました。前半のうちにスコットランドは2-0でリードして、あとはちんたらちんたらそのまま試合を終わらせてしまったんです。結局スコットランドとブラジルとユーゴスラビアは全部引き分けで、ザイールから何点取ったかの競争になりました。ユーゴスラビアは9-0、ブラジルは3-0で、スコットランドは2-0だったので、得失点差で敗退という、非常にもったいないことをしたのをよく覚えております。

スコットランド流パス・サッカーの日本への伝播	
サッカージャーナリスト 後藤 健生	
《年 表》	
1863.10	ロンドンの11クラブが The Football Association を結成
1863.12	FA、統一ルールを制定（ボールより前の選手はすべてオフサイド）
1866	オフサイド・ルールの改正（守備側後方から3人目がオフサイド・ライン） 前方へのパス（フォワードパス）が可能に
1867.7	グラスゴーで Queen's Park Football Club 創設
1872	同クラブがパッシング・ゲームを“発明”
1872.11	初の国際試合 Scotland vs. England at Hamilton Crescent, Glasgow
1873.3	The Scottish Football Association 創設
1873	Archibald Lucius Douglas 中佐ら英海軍使節団、築地の海軍兵学寮に到着 Douglas 中佐はケベック（英領カナダ）生まれのスコットランド系 同年冬 Football を実施（指導者は不明）
1873.11	工部省工学寮工学校開校 Henry Dyer らスコットランド人教官団来日 同年冬 Football を含むスポーツ教育開始（留池） Richard Rymer=Jones 技師（スコットランド人）が指導
1889.12	Central Argentine Railway Athletic Club(現 CA Rosari Central)創設 ロサリオではスコットランド人技師が鉄道事業に従事。スコットランド流 パス・サッカーが確立。ブエノスアイレスではまだイングランド流
20世紀初	スコットランド流パス・サッカー中欧地域に伝播 ハンガリー・チームの来訪でブエノスアイレスでもスコットランド流が隆盛
1914.10	日本軍、中国山東省膠州湾のドイツ租借地（青島）を攻略。ドイツ軍捕虜来日 千葉県習志野収容所、広島県似島収容所などで地元学生チーム交流
1920	チェコ軍団がウラジオストクから日本経由で帰国 ヘブロン号が遭難。乗船のチェコ軍人が神戸に滞在。神戸一中と試合
1920	チョウディン（Kyaw Din）来日。東京高等工業学校紡織科に留学
1922	早稲田高等学院で指導開始。1923.1の全国高等学校大会で早高が優勝
1923.9	関東大震災発生。東京高等工業学校校舎が倒壊して閉鎖 チョウディン、『How to Play Association Football』を出版。 「フットボールはスコットランド発祥」との記述 全国巡回指導を開始
1924	チョウディン帰国
1925	オフサイド・ルールの改正（守備側後方から2人目がオフサイド・ライン）

1) ショートパスサッカーを「発明」したスコットランド

さて、スコットランドのサッカーについてです。初期のサッカー史において非常に重要なものでした。イングランドのロングパスに対してスコットランドはショートパスと、対比させて語られることが多いです。スコットランドはショートパスをつなぐサッカーを発明した。最近私は「発明した」という言葉を使っています。いまのスコットランドとはだいぶ違うと思いますけど、スコットランドのショートパスサッカーが、後の世界のサッカーに対して非常に大きな影響を与えたということです。

1863.10	ロンドンの11クラブが The Football Association を結成
1863.12	FA、統一ルールを制定（ボールより前の選手はすべてオフサイド）
1866	オフサイド・ルールの改正（守備側後方から3人目がオフサイド・ライン） 前方へのパス（フォワードパス）が可能に
1867.7	グラスゴーで Queen's Park Football Club 創設
1872	同クラブがパッシング・ゲームを“発明”
1872.11	初の国際試合 Scotland vs. England at Hamilton Crescent, Glasgow
1873.3	The Scottish Football Association 創設

スコットランドのショートパス・サッカーがどうして生まれたのかということを中心に振り返っておきたいと思います。まずサッカーというスポーツができたのは、1863年10月にロンドンのクラブが集まって、The Football Association を作りました。イングランドのサッカー協会です。12月に初めて統一ルールができます。それまでのフットボールは、大部分は共通してはいますが、クラブごとに違うルールでやっていた。そこで統一ルールを作ろうということになり、それがFA創設のそもそもの目的だったわけです。1863年に統一ルールが作られ、アソシエーションフットボール、その略語としてサッカーと呼ぶわけですが、いまのサッカーができました。

最初のルールは非常に簡単なものですが、そこでラグビー派と分かれるわけです。いまのラグビーとサッカーは全く違うスポーツになっていますが、1863年当時のラグビー式とアソシエーション式の違いはほとんどなかったわけです。違い、ラグビーの方はボールを抱えたまま走っていい。サッカーでも、手でボールを扱ってもいい。フェアキャッチあるいはワンバウンドでボールを拾ってパスするところまでは許されていましたが、ボールを抱えたまま前に走るランニングインというプレーは許していませんでした。

それとハッキング、相手の脛を蹴るのを禁じるかどうかもありましたが、違いはそこだけなんです。いまのラグビーだとトライで得点するのが一番ですが、昔はサッカーもラグビーもゴールラインの向こうにボールが転がっていった時は、敵味方が走って行って、攻撃側が先にボールを押さえた場合はフリーキックになって、そこからゴールを狙っていいことになっていました。ラグビーもサッカーも同じです。ラグビーも、もともとボールを押さえたいまのトライだけでは得点にはならない。ゴールに入ったら得点でした。要するにボールを持って前へ走っていいかどうか、ただそれだけの違いだったわけです。

オフサイドルールも、最初はボールより前は全てオフサイド。いまのラグビーと同じです。ですから、ボールを前に進める方法としては、いまのラグビーと同じようにならざるを得ない。ラグビーではボールを抱えて前に走る。これはサッカーでは禁じられているので、その代わりにドリブルをする。またはキックをして、ボールより前にいる選手はオフサイドなので関われませんが、蹴った瞬間にボールより後ろにいる選手はオンサイドですから、彼らが走って行ってボールを確保する。あとは、ラグビーのモールとかラックとかと同じようにボールを進めていくというゲームでした。

1863年にルールができますが、それから数年、10年ぐらいで次々とルールが変更されていくんです。例えば最初は8ヤード間隔でポストが立っていて、その間にボールが入ればどんな高さでも得点だったんですが、そのうちにテープが張られて、それより下でないといけなくなった。テープが、のちにクロスバーになっていきます。ラグビーは、バーより高い方をゴールと認め、サッカーはバーの下に入ったのをゴールとして認めるわけです。最初のルールでは手を使ってもかまわない、フェアキャッチしていいとなっていました。1年後には手を使ってもいけないとルール変更されます。

このようにいろんなルールが変わっていききましたが、一番重要なのはオフサイドルールの変更です。3年後の1866年です。ディフェンス側の後ろから3人目のプレーヤー、いまは2人目ですが、このときは3人目のプレーヤーがオフサイドラインになりました。これは非常に面白いルールです。いろんな競技にオフサイドがありますが、ディフェンス側がラインを決めているわけです。フィリップ・トルシエが得意だったように、ディフェンスが上がれば、相手をオフサイドに陥れることができる。こういうオフサイドルールは他の競技にはありません。



それはともかく、オフサイドルールが変更されたことで、前方にパスをすることができるようになりました。3人目のオフサイドラインより手前にいる選手であれば、前方であってもパスをつけることができる。これは大きな違いです。前方へのパスが許されるということは、一回バックパスしても、またすぐにフォワードパスを繰り返せるので、パスをつないでサッカーをすることができるという新しい局面に入ってくるわけです。

そこでスコットランドの人たちがパスサッカーを確立した。主役となったのが、グラスゴーに作られたクイーンズパーク・フットボールクラブです。1867年に作られたこのクラブ、先日、日本代表の試合が行われたハンプデンパークを所有しているクラブです。のちにプロ化が進む中でもアマチュアをずっと守り続け、2019年11月に初めてプロ化したというクラブです。一時は下部リーグまで降格しましたが、プロ化した後はまたランクを上げてきて、現在はスコットランドのチャンピオンシップ、つまり2部リーグの、いま6位にいるそうです。そのクイーンズパークは、当時のスコットランドで圧倒的な力を持ったクラブです。例えば1872年にスコットランド対イングランドの国際試合がグラスゴーで行われましたが、この時のスコットランド代表は、11人全員がクイーンズパークの選手でした。このクイーンズパークの人たちが、オフサイドルールの改正を利用してパスをつなぐサッカーを発明したと言われていています。これは事実なんだろうと思います。こういう形でイングランドに対抗するようになるし、スコットランドのパスサッカーが世界に広まっていくという流れになるわけです。

その後の流れについてはまたあとで触れますが、ではなぜスコットランドでパスサッカーが始まったのかについては、僕にはまだわからないんです。あとでスコットランドのフットボールに詳しい黒田先生からもこの点についてご意見を伺いたいところです。



ロンドンのFAがルールを改正したのですが、イングランドでは相変わらずロングパス中心の、要するにキックアンドラッシュのサッカーをやっているのに、スコットランド人はパスサッカーを始めたんです。なぜかはわかりません。そして、そういうことについて書いた文献も読んだことがないんです。ご存知の方がいたらあとで教えていただきたいところです。

昔からよく言われていたのは、アングロサクソンのイングランド人に対して、ケルト系のスコットランド人は体が小さかったからそうなったんだということです。そういうことを僕も本に書いたことがあります。よく考えてみると後付けの理由じゃないかという気がするんです。

あと、初期のフットボールでは、イングランド北部の工業地帯にプロクラブができるんですけど、そこではスコットランド人選手をたくさん雇っていました。スコットランド人選手たちは技術的に優れ、テクニカルな選手が多かったと言われていたので、スコットランドの方がイングランドに対してテクニカルなフットボールをやっていたのかもしれない。

それはなぜかとさらに遡って考えれば、中世のフットボールのころから、スコットランドでやっていたフットボールとイングランドでやっていたフットボールの違いがあったのかもしれない。僕の想像です。いろんなことが考えられるので、これからの課題として、ぜひ調べてみたいと思います。

あと、スコットランドには工業都市が多いです。グラスゴーなどがそうですね。あとで出てきますが、工学部とか、技術系のことが盛んだだったので、合理性を追求する人たちが多かったのかもしれない。いろんなことが考えられます。

とにかくそういうことで、スコットランドでは歴史的事実としてショートパスのサッカーが行われるようになりました。イングランドはまだ昔ながらのキックアンドラッシュをやっていたという時代があったわけです。

2) 世界に広がるショートパスサッカー—中欧、そして南米へ

スコットランドのショートパス・サッカーは、結果としてこうなったという話ですが、歴史的事実としては、まず中欧と呼ばれるチェコスロバキア、オーストリアといった地域にサッカーが広がっていきました。中欧の人たちは、早い時期からショートパスをつないだ合理的なサッカーをしていました。なぜそうなのかと言うと、これもわかりません。想像として言いますと、ヨーロッパの中部でサッカーという新しいスポーツを受け入れた人たちは、たいてい工場の経営者や労働者たちでした。それとコスモポリタン。外国のことによく通じている人たち。これは当然ですね。イングランドで生まれたものを取り入れるわけですから。あともう少し言えば、ユダヤ系の人。こういう人たちが結構多かった。例えばバイエルンミュンヘンは、完全にユダヤ系の人たちが作ったクラブですね。

ロシアでフットボールを始めた人たちも、やはり工場の経営者や労働者です。やはりどこか合理性を尊ぶ人たちがフットボールを取り入れたおかげで、パスをつないで戦った方がいいと考えたのではないかということです。ともあれ、まず中央ヨーロッパにショートパスのサッカーが広まりました。

いまのパスサッカーを極めた国といえばアルゼンチンだと思います。3月に日本がスコットランド、イングランドに遠征していた時に、アルゼンチンはスペインとフィナリッシマ (Finalissima : UEFA 欧州選手権とコパ・アメリカの優勝チーム同士が対戦する試合) をやる予定だったのが、トランプのおかげでできなくなり、ブエノスアイレスでモーリタニアとザンビアという、ちょっと格下との試合をしました。全部ツータッチの、正確で速いパスをつないでいました。個人がドリブルで抜いていけば簡単に点が取れるだろうという相手に対しても、パスをつなぎまくっていました。

アルゼンチンでそういうサッカーが広まったきっかけが2つあるんです。一つは、セントラルアルゼンチン・レールウェイ・アスレティッククラブができた。ロサリオセントラルの前身です。ここでスコットランド系のサッカーが始まります。いまでもロサリオの人に聞くと皆が自慢するんです。俺たちは昔から美しいサッカーをやっていたんだと。

なぜかと言うと、当時のアルゼンチンは経済的にイングランドに支配されていた国です。イングランドは小麦をアルゼンチンから大量に輸入するわけです。そのため、パンパに広がる小麦畑から積み出し港まで、鉄道を敷くんです。鉄道は、当時のイギリス人の得意分野です。鉄道を敷いて、そこからみんな積み出すわけですが、ロサリオのあったサンタフェ州の鉄道は、全部スコットランド系が握ってたんです。スコットランド人の経営者、スコットランド人の技師が鉄道を運営していた。ですから、彼らがやっているフットボールは当然スコットランド流になるわけです。それを真似て、現地のアルゼンチン人もショートパスのサッカーをはじめました。ブエノスアイレスではまだ野蛮なキックアンドラッシュをやっていたところに、うちらはショートパスの美しいサッカーをやったんだぞと。

1889.12 Central Argentine Railway Athletic Club(現 CA Rosari Central)創設 ロサリオではスコットランド人技師が鉄道事業に従事。スコットランド流 パス・サッカーが確立 ブエノスアイレスではまだイングランド流
20世紀初 スコットランド流パス・サッカー—中欧地域に伝播 ハンガリー・チームの来訪でブエノスアイレスでもスコットランド流が隆盛

ではブエノスアイレスではどうなったかと言うと、1910年代にハンガリーのクラブチームが遠征してきて、そのサッカーを見て「これだ！」とみんな思ったと言うんです。どこまで本当の話なのか、僕はいまだに信じきっているわけじゃありませんが、そのようにアルゼンチンでは言われています。

ハンガリーやチェコスロバキアあたりでは、早くからスコットランドのショートパス・サッカーを取り入れていました。そのチームがパスサッカーを見せたことで、ブエノスアイレスのサッカーも変わり、いまのアルゼンチンのサッカーが生まれたというわけです。

3) 日本に伝わるスコットランド式のショートパス・サッカー

ではこれが日本とどう関係していくかという話です。先ほど中塚先生のお話であったように、最初に横浜の居留地でフットボールが行われます。ただ、これは外国人同士が勝手に、と言ってもちゃんと横浜フットボールアソシエーションという組織を作ってやったのですが、残念ながら日本人がこれに参加したという記憶はありません。例えばポルトガルやイタリアなどでは、イングランド人がフットボールをやっていると現地の人たちが飛び入りで入ってきて真似をするんですけど、当時の日本人はあそこには入れなかったらしくて、横浜でも神戸でもそういう記録は残っていません。

最初に日本人がフットボールをプレーしたのは、確実なところで言うと 1873 年の海軍兵学寮です。これは有名ですね。従来はダグラス少佐と言われていましたが、ダグラスさんは 1873 年 7 月に顧問団を率いて築地の海軍兵学寮、いまの国立がんセンターのあるところに着任します。その時は少佐だったんですが、9 月には中佐に昇進していますので、ここではダグラス中佐としたいと思います。兵学寮は後の海軍兵学校で、江田島に移ります。

ダグラスさんが着任のころまでは、教科書で学ぶ座学が中心でした。彼はそれを改め、体育教育、例えば馬術とか剣道とかレガッタとか、そういうスポーツを奨励しました。娯楽としてもビリヤードやボーリングなど、イギリスでやっている遊びを一所懸命やらせようとしています。その中の一つにフットボールがあったということです。当時のイングランドの常識としては、フットボールは冬のスポーツですから、おそらく 1873 年の冬、11 月から 12 月にかけて、フットボールを初めて日本人がやったのはほぼ間違いないだろうと思われま。

ただし実際にフットボールを指導したのはダグラス中佐ではありません。ダグラス中佐はカナダのケベック生まれで、両親はスコットランド人です。団長ですけれども、実際にグラウンドの上でフットボールを指導した人が誰かということは、残念ながら記録に残っていません。

どちらが先かはわかりませんが、ほぼ同時期に日本人がフットボールをプレーしたのが工部省工学寮です。いろいろ変遷があつて、いまの東京大学工学部の前身になるわけですが、日本の近代建築を始め、東京駅の設計をした辰野金吾博士などを輩出したのが工学寮です。こちらは 1873 年の末に、いま霞が関ビルがあるところに洋式の校舎が造られ、その直前の 11 月に開校しています。いまの溜池ですね。溜池というのは江戸城の外堀で、昔から池があったところを利用して外堀に利用するわけですが、そこの干上がったところが運動場になっていたと言われてい。

ここではテニス、クリケット、それからシンキーというスコットランドのスポーツ、ベースボール、フットボールなどが行われたということです。この工学寮にイギリスからやってきた教師団のヘンリー・ダイアーという人が、校長のような仕事をしました。この人はスコットランドのグラスゴー大学の人です。先ほども言いましたように、グラスゴーは世界の工学の中心地の一つで、教授団とは別に、多くの技術者を抱えています。例えば蒸気機関でおなじみのジェームス・ワットもグラスゴー大学で技師をしています。

この場合は、実際にフットボールを指導した人もわかっています。土木測量技師だったリチャード・ライマー・ジョーンズという人です、この人が溜池のグラウンドで日本人相手にフットボールをさせていました。この人も当然スコットランド人です。日本人は最初からスコットランド人の指導を受けていたということです。

ただし、この当時どんなフットボールをやっていたのかはわかりません。フットボールなんて見たことも聞いたこともない日本人学生にやらせているんですから、ここではイングランド式もスコット

ランド式もないし、そもそもラグビーだったのかもしれませんが、ラグビー側の人は、あれはラグビーだったといまでも主張しています。

ラグビーだったかサッカーだったかも判然としない。たぶんどっちでもいいんです。最初に言ったように、ルールだってそんなに違わないわけですから。初めてフットボールを日本人にやらせる時に、ラグビー式かアソシエーション式か、イングランドでもいろんなルールがまだ併存している時代ですから、そんな時代に教師団がそこまで考えるとは思えません。この時はスコットランド式のサッカーかどうかというわけではありませんが、とにかく最初からスコットランド人と縁があったということを指摘させていただきます。

では日本人がパスサッカーというものに最初に出会ったのはいつかということ、ドイツ人捕虜との接点が重要です。1914年に第一次世界大戦が始まります。当時の日本はイギリスと軍事同盟条約、日英同盟条約を結んでいて、連合国側で参戦し、ドイツが中国の山東省に持っていた青島租借地をイギリス軍と共に攻略し、約4,700人のドイツ人捕虜を日本に連れてきます。最初は既存のお寺や学校、病院などに無理やり押し込んだのですが、各地に収容所を作ります。有名などころでは徳島県の板東、千葉の習志野、兵庫の青野原などです。収容所では非常に良い待遇を与えるんです。というのは、この頃の日本は西洋に対して、日本は文明国であるということを主張したいわけで、国際法を遵守し、捕虜に対する規約も守ります。後の日本のやり方とはずいぶん違います。ドイツ人捕虜に対して非常に良い待遇を与えました。

そこで彼らはフットボールチームを作ります。グラウンドを作り、ドイツ人捕虜たち同士でフットボールの試合をし、そのうち現地の日本人学校のチームとも試合をするようになります。他にも有名などころでは、初めてベートーヴェンの第九を演奏したのがこの時のドイツ人捕虜でした。ローマイヤのハム、ソーセージも、この時の捕虜が持ち込んだものなどいろんな話があります。

ドイツ人捕虜たちと日本人学生の試合。当時のドイツ人は、先ほど言いましたように中央ヨーロッパのショートパスのサッカーをすでに身につけており、そういうものを日本人が経験したのです。

例えば広島に似島収容所があります。似島というのは、いまの広島港から呉の方にフェリーで渡ると、目の前に最初に見えてくる島です。そこに収容所が置かれていて、そこと広島高等師範学校とか県師範学校のチームと試合をします。広島高師のキャプテンは、毎週似島に渡ってドイツ人から指導を受けて、広島のレベルが上がっていきます。1921年に始まった全日本選手権で、第4回、第5回大会で連覇するのが鯉城クラブ。広島高師のOBを含めたクラブです。広島勢が強くなっていきました。

1914.10	日本軍、中国山東省膠州湾のドイツ租借地（青島）を攻略　ドイツ軍捕虜来日 千葉県習志野収容所、広島県似島収容所などで地元学生チーム交流
1920	チェコ軍団がウラジオストクから日本経由で帰国 ヘブロン号が遭難　乗船のチェコ軍人が神戸に滞在　神戸一中と試合

もう一つ、これはもう少し小さい規模の話ですが、チェコの軍人が日本にやってきたという話もあります。チェコスロバキアというのは、当時はオーストリア=ハンガリー帝国の一部として支配されていました。そこで独立を求める人たちが、第一次大戦中はロシア側、つまりオーストリア帝国の敵側であるロシア側に入って戦争するわけです。ところがロシアでは1918年に革命が起こり、講和が結ばれて戦争が終わってしまいます。チェコスロバキアの軍人は、何とか西側に移って西部戦線でオーストリア=ハンガリー側と、あるいはドイツ側と戦争をしたいと思うんですが、ロシアは大混乱に陥ってなかなか脱出できない状態になる。そしてポリシェビキの赤軍と戦闘を行うんです。エカテリンブルクとかサマラとか、我々が8年前のワールドカップで行った街がいっぱい出てきますが、そういうところがみな戦場になっています。

彼らはどうしたかという、シベリアを越えてウラジオストクから海路、北米経由でヨーロッパに戻ることとなります。それに伴い、日本軍が中心となった連合国側がシベリアに出兵します。彼らを救い出すのが唯一の目的ではありませんが、とにかく日本もシベリアに出兵して、チェコスロバキアの軍人が船で太平洋を渡ることになるんです。

1919年8月に、船が九州の沖あたりで台風に遭って遭難するんです。遭難した人たちが船の修理をする間、4ヶ月ぐらいいたはずですが、850人ほどが神戸に滞在することになります。このとき、神戸にやってきたチェコスロバキアの軍人たちが神戸一中と試合をした。パスサッカーを完全に身につけているチェコ人たちと神戸一中が試合をしたのは、チャー・ディンの前に日本サッカーがパスサッカーと接触した経験だと言えるでしょう。

4) チャー・ディンのこと

最後にチャー・ディンの話です。

最初に中塚先生から写真入りで紹介がありましたが、日本にサッカーを教えてくれたビルマ人です。エンジニアで、東京高等工業学校、いまの東京科学大学、この間まで東京工業大学と言っていたところの留学生でした。第二次世界大戦後はビルマの工業界にすごく尽くした、非常に優れたエンジニアです。そういう背景もあって、非常に合理的な指導法でした。ボールをどういうふうに蹴ったらどのように力が伝わり、どう飛ぶのかとか、どういう角度からシュートを打ったらどうなるのかとか、図入りで合理的な指導法をしてくれました。そして彼が身につけていたのがスコットランド流のショートパスだったということです。

彼はスコットランド人からフットボールを学んでいるんです。彼が日本で出版した **How to Play Association Football** という本の総論のところにこう書いてあるんです。「ア式蹴球はスコットランドに起源を有す」と。サッカーの起源はイングランドというのが常識的だろうと思いますが、彼はスコットランドが起源だと言っています。これは明らかにスコットランド人から聞いた話ですね。というのは、当時のビルマはイギリスが支配したインド帝国、事実上のインドでイギリスの植民地。その一部になっていたところなんです。そして当時、ビルマに駐留していた政府の文官も軍人も、スコットランド人が多かったそうです。史実的に調査すれば、どこの大隊がどのように配置されていたかがわかるはずですが、とにかくスコットランド人がビルマにはたくさんいました。チャー・ディンはもともと走り高跳びの優秀な選手だったわけですが、彼はスコットランド人からフットボールを学び、彼を通してスコットランド流のフットボールが、1920年代の初めに各地に広がっていきました。

1920	チャウディン (Kyaw Din) 来日 東京高等工業学校紡織科に留学
1922	早稲田高等学院で指導開始 1923.1の全国高等学校大会で早高が優勝
1923.9	関東大震災発生 東京高等工業学校校舎が倒壊して閉鎖 チャウディン、『How to Play Association Football』を出版 「フットボールはスコットランド発祥」との記述 全国巡回指導を開始
1924	チャウディン帰国
1925	オフサイド・ルールの改正 (守備側後方から2人目がオフサイド・ライン)

先ほど鈴木重義さんの話が出ました。チャー・ディンがフットボールの指導を始めたきっかけは早稲田高等学院です。彼は走り高跳びの選手だったので、早稲田のグラウンドで練習をしていたら、隣で早稲田のア式蹴球部、そういう名前が付いていたかどうかは知りませんが、サッカー部が練習を

していて、あまりにも下手だったんでしょうね。見るに見かねて、じゃあ俺が指導してやると言って指導したら、早稲田高等学院はたちまち全国高等学校蹴球選手権で連覇しちゃうわけです。

早稲田は東京高師や帝大に比べると格下でした。高等学校大会に、本当は早稲田なんか入れてもらえなかったんです。それを鈴木重義さんがゴリ押しして仲間に入れてもらった。ところがその早稲田が優勝してしまった。いったい何だというと、チャー・ディンというビルマ人がいるということが広まって、全国から引く手あまたになって巡回コーチをする。巡回コーチを引き受ける時に、How to Play Association Footballの本を必ず買ってこれという条件です。そういう仕組みでやった。チャー・ディンという人はその辺でも合理的な人だったようですね。有名なところでは、旧制山口高校に竹腰重丸さんがいました。竹腰さんはJFAで、会長はやっていませんが、専務理事、代表監督、審判委員長などあらゆることをやった方で、日本サッカーの中心人物です。彼が山口高校で巡回指導を受け、それから全国巡回指導に同行するんです。チャー・ディンのまさに愛弟子です。

こうして日本では、スコットランド流が全国に広まって根付いていきます。紆余曲折はあったにせよ、いまでも日本のサッカーはパスサッカー。いかどうかは別として、日本のサッカーはやはりいまでもそれが武器ですよ。この間は見事なパスサッカーで本場スコットランドを倒したわけです。

世界のサッカーと日本。100年以上前にこうやって、世界の潮流、スコットランドで生まれたショートパスのサッカーが世界に広まって大きな影響を残していく。それに当時から日本も関わっていたというのはすごいことだと思います。

日本のサッカーとスコットランドの関係は、非常に古くて、そして非常に日本のサッカーの体質に組み込まれた大きな出来事だったという話です。

時間になりましたので、私の話はこれぐらいで終わらせていただきます。

3. スコットランドのサッカー文化とスターリング・アルビオンの記憶（黒田勇）

関西大学を定年退職後、年金生活者になってあちこち出かけています黒田です。

関西大学サッカー部と共催ですので、本来でしたら部長が挨拶をするところですが、今日は関西でも学生リーグがあつて来られません。ちなみにいまの監督の前田さんも関大OBですが、ガンバで活躍した元選手です。Jリーグの10,000点目のゴールを決めた人です。会場にはライバルの阪南大学の元監督の須佐さんも来られています。阪南大にはいつも関大はやられているんですが、この前は完勝でした。

十数年サッカー部の部長をし、1回だけ全日本で優勝できました。感動でした。それ以来15~6年経っていますが関大は優勝しておりません。というような余計な話をしますと時間がなくなるので本題に入ります。

日本サッカー130年目の挑戦 —SAMURAI BLUEの恩人スコットランドも応援しよう— 「スコットランドのサッカー文化とスターリング・アルビオンの記憶」



- 1951年大阪市生まれ
- 2021年まで関西大学社会学部教授
- 現在、関西大学名誉教授
- 2008-2020年 関西大学サッカー部部長
- 1995-1996年 スターリング大学在外研究
- 2005年 エジンバラ大学在外研究
- 専門 メディア社会学・スポーツ社会学
- メディアとスポーツに関する著作多数
- 『日本サッカー協会百年史』に「サッカーとメディア」のコラムを執筆、「スターリングアルビオン」の来日について紹介

1) スコットランドのサッカー文化

■ショートパスの由来

後藤さんの話の中で、スコットランドはなぜパスサッカーなのかという疑問が示されましたが、James Walvin が著した THE PEOPLES GAME にはこのように書かれています。

「19世紀、イングランドでは、エリート学生たちがドリブルやフェイントという個人技を披露する文化が主流であったのに対し、スコットランドでは共同体の対抗スポーツとして、勝敗にこだわる戦術としてのパスが発達した」。英国サッカー史の有名な本の一節です。

これについて10数年前に、私は賀川浩さんに伝えたのですが、賀川さんは別の説を頑として信じておられました。それは、英国では一般的な社会学的な説明になるのですが、19世紀後半、イングランドでは、フットボールであってもエリートのスポーツです。オックスフォード、ケンブリッジの学生たちがサッカーする。その時には、勝敗よりも、あるいはチームプレーよりも、一人一人がどれだけかっこいい技を見せるかというのがメインだったんです。イングランドサッカーでは、基本的にはドリブルなどの個人プレーを評価していた。一方、サッカーが広がっていく中で、先ほどオフサイドの話も出しましたが、スコットランドではエリートというよりも労働者階級のコミュニティスポーツとして広がっていきました。コミュニティ同士の対抗戦の中で勝利を求める。サポーターも含めて皆が共同体を応援するわけです。するといかに勝つかということからパスサッカーが盛んになる。ショートパスで得点を狙いにいく。オフサイドルールができて、ますますその傾向が強まったというのが、ウォルビンの説だということです。ご参考まで。

■28年ぶり出場のスコットランド代表—レジェンドの話

スコットランド代表は28年ぶりの出場です。1954年のスイス大会からずっと出ていたのですが、このところ出ておりません。1974年の最強チームも、ザイールにもったいないゲームをして2次ラウンドに上がれませんでした。そのときのメンバーです。我々の年代ではこの頃のスコットランドのスターが有名ですよ。ブリー・ブレムナー、ジミー・ジョンストン、ケニー・ダルグリッシュ、ジョー・ジョーダン、ピーター・ロリマー、デニス・ロー…。年配のファンはご存知の名前です。

少し後の世代ですとゴードン・ストラカンがいます。中村俊輔の時のセルティック監督で、代表監督もしました。スコットランド人が大好きな選手です。最も有名なシーンは、これも年配の方はご存じでしょうが、1986年大会です。スコットランド対ソ連の試合でストラカンがシュートを決めます。サポーター席へ走

• 1 GK	David Harvey	England Leeds United
• 2 DF	Sandy Jardine	Scotland Rangers
• 3 DF	Danny McGrain	Scotland Celtic
• 4 MF	Billy Bremner	England Leeds United
• 5 DF	Jim Holton	England Manchester United
• 6 DF	John Blackley	Scotland Hibernian
• 7 MF	Jimmy Johnstone	Scotland Celtic
• 8 FW	Kenny Dalglish	Scotland Celtic
• 9 FW	Joe Jordan	England Leeds United
• 10 MF	David Hay	Scotland Celtic
• 11 FW	Peter Lorimer	England Leeds United
• 12 GK	Thomson Allan	Scotland Dundee
• 14 DF	Martin Buchan	England Manchester United
• 15 MF	Peter Cormack	England Liverpool
• 16 DF	Willie Donachie	England Manchester City
• 19 FW	Denis Law	England Manchester City
• 20 FW	Willie Morgan	England Manchester United



っていき、看板を乗り越えようとしたけど乗り越えられず、片足を上げて帰ってくるというシーン。これはスコットランド人のベストメモリーで、ほぼ毎年、大晦日あたりではこのシーンがスコットランドのテレビで放送されています。

ジミー・ジョンストンがセルティックのユニフォームを着ている写真があります（ここでは略）。セルティックは、最も遅くまで背番号がなかったチームです。1970年代初頭までありません。どうしてもつけろと言われて、最初はショーツにだけつけたというエピソードもあります。

これらスコットランドのレジェンドたちの中で、すでにレジェンドの仲間入りをしているのがスコット・マクトミネイでしょう。2025年11月18日の予選最終節のデンマーク戦。開始3分でオーバーヘッドキックを決めました。インパクトの時の足の高さが約2.53m。クリスティアーノ・ロナウドが

2018年のコベントス戦で決めたオーバーヘッドの2.38mを超えて世界最高ということで、いまギネスが認定調査中ということです。

この試合はすごかったです。4-2で勝つんですけど、アディショナルタイムで2得点。セルティックに戻ってきたキーラン・ティアニーと、自陣から60m近いケニー・マクリーンのロングシュートが決まり、スコットランドの500万人が大騒ぎになりました。

スコットランドに行かれた方は見られたと思いますが、オーバーヘッドを決めたスコット・マウトミネイの写真はグラスゴー中、至るところにありましたね。現役ながら、彼はもうレジェンドに入っていると言えるでしょう。

この人はスコットランド人だけど、生まれはイングランド。スコットランドって一体何なのという話ともつながりますが、スコットランド人とは何かの定義は非常に曖昧なんです。先祖にスコットランド人がいたという申請でほぼOK。イングランド出身だけど、ずっとスコットランドに住んでいるというのもOKです。

どんな歴史があったのかは後ほどお話します。要はこのマクトミネイ、いまナポリにいるんですけど、やはり子どもたちは彼が一番好きになったみたいですね。

この時の熱狂があったので、日本戦は家族連れもたくさんハンプデンパークに来ていました。しかしパツとしない試合だったのでシーンとしていましたね。

2) そもそもスコットランドとは

■歴史的背景

「スコットランドとは」というのはなかなか難しいですね。アルバ王国というのが日本の奈良時代にできました。ピクト人やスコット人、昔のゲール人などが一緒になってできたのですが、その後は曖昧なままイングランドの侵略を受けたりします。当時はいまのような国民国家ではないので、緩やかな形で支配されていたんです。

ところが1314年、スターリングという町の南にあるバノックバーンというところで、イングランド

王のエドワード1世がやってきたのを打ち破るんです。その戦いの結果、正式にスコットランドが独立するという歴史があります。国歌の話にもつながりますが、イングランド国王が攻めてきたというのが象徴的です。

スコットランド人とは何かというと、これはオチで言おうと思っていたことですが、スコットラ

ンド人はサッカーやラグビーのとき、一番応援するのは当然スコットランドです。二番目に応援するのがどの国か知ってますか？ 答えは「イングランドと対戦する国」です。このことが、スコットランドのアイデンティティを象徴的に表している。つまりスコットランド人とは、大きく言えば「イングランドと対抗している私たち」なんです。法律的な話とは違いますが、常に「イングランドと私たち」という意識があるわけです。



続けます。1707年の合同法で、スコットランドとイングランドは合併、吸収合併させられます。その結果として、その後300年ほどはほぼイギリスだったんです。ただ、経済が良くなってくると独立機運は高まります。とりわけ北海油田ができてからは、「あれはうちのものだ」という機運が高まります。そういう機運をなくすために、当時のブレア首相が「では議会を作りなさい」と言い、スコットランド議会を復活させます。1999年です。国の中の国みたいなことですね。行政的にも違うところがいろいろあり、教育制度も異なります。

2015年には独立の住民投票がありました。その時は私も仕事で行っているいろいろ調べたのですが、話を聞いた全員が「当然独立だ」と言っていました。しかし投票結果は賛成票が48~9%で、わずかの差で現状維持の方が勝ってしまいます。このあたり、本音と建前が微妙にあります。

ただ、話を先走りしますと、英国がEUから脱退してしまいました。その結果、いまは本音でも建前でも完全に独立志向です。だから次に住民投票が許可されれば、スコットランドは間違いなく独立します。スコットランドは英国と一緒にいるよりも、EUの中にいた方が経済的にも圧倒的に有利だという判断です。だからいかにそれをさせないかということの象徴として、エリザベス女王が亡くなった時、わざわざお葬式をエジンバラのセントジャイルズ教会でやり、葬儀の行進もそこからやりました。エリザベス女王の遺言でもありました。統合したUnited Kingdomだということを主張する遺言だったと言えるでしょう。それぐらい、独立機運はまた高まっているようです。

■スコットランドと産業革命

スコットランドは合併されたけど、実はイングランドからものすごい恩恵を受けています。産業革命の時代は、工業地帯として最も発展した地域でもあります。写真はフォースブリッジという世界遺産で、1890年完成です。日本からの留学生、渡辺嘉一が設計にも参画しています。

それからクライゲラヒブリッジは、ウイスキーのスパイサイドにかかっている橋で、現存するスコットランド最古の鉄橋です。テルフォードという人の設計で、非常に有名な橋です。

右下の写真は、ロバート・オーウェンのニューラナークの世界遺産で紡績工場です。だいぶ前に私の同級生を案内した時の写真です。ロバート・オーウェンについてはご存知かと思いますが、空想的社会主義と言われ、非常に過酷な労働をさせられている紡績工場の中での福利厚生をやった方です。



というように、産業革命の時代にいろんな人を輩出し、いろんな遺跡が残っています。

スコットランドは、イングランドからの資本で発展し、19世紀から20世紀初頭まで華やかな時代を過ごしました。ただ、労働者はかなり苦しい生活でした。労働者にとっての娯楽として、イングランドよりもかなり早くから労働者の間で広がっていったのがフットボールでした。ロバート・オーウェ

ンのニューラナークでも、例えばフットボールをする時にも、何か華麗なプレーを見せるよりも、対抗戦だという意識が高まっていくということです。

■スコットランドと日本人

スコットランドと日本人ということでは、先ほど名前が出た、フォースブリッジを作ったうちの一人、渡辺嘉一さんです。留学から帰ってきて、いろんな鉄道会社の経営に携わります。京阪電車の専務だった人ですね。スコットランドのお札にもなっています。

竹鶴正孝さんはニッカウイスキーの創業者。稲富孝一さんはサントリーで初代「響」を作り、「山崎」も作った方です。スコットランドのサントリーに入社して、ヘリオット・ワット大学で醸造の博士を取っています。当時のサントリーは呑気だったというか、入社後4~5年、スコットランドで勉強しに行ってこられました。いま88歳で、辞められた後も長くグラスゴー大学でウイスキーと経済史の研究をされています。文化人です。お友達なんです。

30年以上スコットランドと関わる中で、やはり一番は中村俊輔ですね。

セルティック前監督のロジャースにセルティックパークの前で会ったときに撮った写真です。中村俊輔がデビューした時の写真も2枚ほど貼り付けておきました。右の記事は、セルティックの新スタジアムのために株が上昇しているという記事です。

私が在外研究でスコットランドに行っていたときに中村俊輔がセルティ

ックに来たんです。だから私はパブに行くと「中村は俺についてきたんだ」みたいに言っていました。すると私のことをみんな「中村」って呼ぶので、「僕は兄貴なんだ」と言っていました。中村の兄貴って言うては間はパブでビールはタダだったんです。大げさではなくそうなんです。ただし、皆さんご存知のように、すべてのスコットランドのパブではないんです。セルティック系の、つまりアイリッシュ系のパブはOKですが、レンジャーズ系のユニオン派ではありえません。何となく日本人に対しても冷たかったです。

写真の子どもはスターリング大学の前で出会ったスターリングアルビオンのジュニアチームの子たちです。

■スコットランドのファン、サポーター

スコットランドのファンはすごくフレンドリーだと言われています。でも1970年代はフリーガンだったんです。あまりにひどかったので、スコットランド・トラベルクラブというのを設立し、そこで徹底的な教育をして、いまのようなフレンドリーなサポーターたちができ上ります。



いろいろな賞を取っています。社会学者のエリック・ダニングが言っていますが、「イングランドのファンよりも俺たちの方がいい」と世界に思ってもらいたいという動機が強いということです。先ほどのアイデンティティの話ともつながります。

その代表が、Flower of Scotland という、スコットランド国歌にあたるアンセムです。もともと1967年にBBCの番組で発表されたフォークソングでした。God Save the Queen を歌いたくないということで、ブーイングしたり、いろいろ問題がありました。そのうちラグビー代表がこの歌を歌ったところ好評で、1970年代後半から徐々に広がり、サッカーもナショナルアンセムがこの歌になったのです。二番はアカペラでみんなが歌います。

この歌の歌詞は、基本的にはエドワード軍への対決であり、彼らを打ち破った我々という歌です。バノックバーンの戦い、スターリングブリッジの戦いでイングランドを打ち破ったという記憶です。イングランドと戦ったという記憶が、スコットランド・アイデンティティの中心なんです。

本当にイングランドを嫌っているのか、バカにしているのかというと、そうでもないんです。このあたりのナショナリズムは、世界中いろいろだということですね。何回も言いますが、イングランドからは産業革命以来、すごい恩恵を被ってきたわけです。あえて言えば、ナショナリズムを楽しんでいるんです。ということで時間がなくなりました。本当はこっちの話がメインなのですが…

3) スターリングアルビオンの記憶

■プロクラブの初来日

スターリングアルビオンが60年前に、日本に初めてプロチームとしてやってきました。いまこのクラブはスコットランドの2部リーグにいます。スターリングの街も、スタジアムも綺麗なところです。戦後にできた新しいクラブです。

Tartan Army



- 1970年代までフリーガニズム 1979年のウエンブリーでの騒乱
- 1980年にScotland Travel Clubの設立
- 1992年の欧州選手権「最優秀サポーター」に選出
- 1998年のフランスW杯 Supporters Award受賞
- 「イングランドのファンよりも、自分たちの方がまともだと見られたい」願望 (E.Dunning)
- 国歌についても
God Save the Queenへのブーイング
1970年代
"Scotland the Brave" ⇒ "Flower of Scotland"



『Flower of Scotland』

<https://youtu.be/X1nfMArc7zs?si=1j1-1NRax4bJzYQEI>

フォークグループThe Corriesによる楽曲。1967年にBBC番組で発表。ラグビー代表のアンセムとして広まり、サッカーでも歌われるようになった。

<p>O Flower of Scotland, When will we see your like again That fought and died for Your wee bit hill and glen. And stood against him, Proud Edward's army, And sent him homeward Tae think again.</p> <p>The hills are bare now, And autumn leaves lie thick and still O'er land that is lost now, Which those so dearly held That stood against him, Proud Edward's army And sent him homeward Tae think again.</p> <p>Those days are past now And in the past they must remain But we can still rise now And be the nation again! That stood against him Proud Edward's army And sent him homeward Tae think again.</p>	<p>おお、スコットランドの花よ 汝のために闘い そして死なん 山々にまたその姿見ゆるや エドワード軍への決死の抗い 暴君は退却し 侵略を断念せり</p> <p>草木も枯れた山々 今や失われた地に 秋の落葉 静かに積もる エドワード軍への決死の抗い 暴君は退却し 侵略を断念せり</p> <p>栄えたる国は過去となりしも 過去には確かに存在した我が国 今だ再起の力を失わず 今こそ国家の独立を果たすのだ！ エドワード軍への決死の抗い 暴君は退却し 侵略を断念せり</p>
---	---

Stirling Albion F.C.

- スターリングにあるクラブチーム
- 2014-15のシーズンにおいてスコットランドフットボールリーグ(Scottish Football League: SFL)の2部に所属。プレミアリーグが存在するので実質4部、いわゆる「ローカルクラブ」。
- スターリングFCは、1945年創立。
- サッカーの盛んなスコットランドでは新しいクラブとして、60年代、スコットランドリーグの1部と2部を行き来していた。
- グローバルなサッカービジネスが展開され始める1990年代以前においては、スコットランドというサッカー強豪国の中堅クラブ
- 1966年6月来日、日本代表、日本選抜と二試合



Prudential proudly supports
Stirling Albion.



来日した1966年6月は、ビートルズが来日して武道館で公演します。日本リーグ初の東西対抗戦があり、翌7月にはW杯イングランド大会です。しかしスターリングFC滞在中にW杯の記事はなく、翌7月の大会期間中もW杯の記事は極めて小さいものです。「サッカーブーム」という言葉が新聞に踊りだしますが、記事は小さいものでした。

アルビオンの試合は覚えておられるでしょうか。6月22日と26日に試合をします。小城がミドルシュートを決めますが、スターリング相手に歯が立ちません。2-4の敗戦でした。「熱戦。力尽きた全日本」。当時は「全日本」と言っていました。

今日この話をしたかったのは、初めてプロのチームが日本にやってきたというところです。それまでプロとは対戦がなかった、できなかったんです。このあたりのプロアマ問題を、中塚さんは修士論文で書かれていたようです。これがいっききっかけになったんです。サッカー協会が先行してやっていき、後付けで体協が認めるという形です。

一番論陣を張られたのは牛木素吉郎さんです。牛木さんのこの時の記事を読んでも、アマチュア以上にプロがフェアで素晴らしいということを一所懸命書かれたわけですね。

The City, Stirling

スターリング (Stirling, Sruighlea, Stirlin)

- ・歴代のスコットランド王の勅許を得た自治都市
- ・スターリング城と中世の市街(オールド・タウン)の周囲に市街地、郊外にスターリング大学
- ・12-13世紀 イングランドとの戦いの中心となった地域

"スターリング橋の戦い"(1294)、"バノックバーンの戦い"(1314)




<p>Japan tour of Stirling Albion in 1966</p> <ul style="list-style-type: none"> ・6月12日「10日来日 英プロサッカー・チーム」(朝日新聞6月12日付)と報道し、プロの来日を強調。 ・6月16日「20日来日の陣容を発表」 「英プロ・サッカー」守備陣は大男がそろっているが、FWは比較的小粒で、激しい守備と機敏な攻撃のスコットランド・スタイルの特徴をもつチームとみられる。(中略)「なお本格的なプロ・サッカーチームの来日ははじめてだが、日本側は航空旅費の一部と一週間分の滞在費を負担、ギャラは支払わない。」(読売新聞6月16日付) <p>6月20日 スターリングFC、ギリシャ、イランを経て来日</p>	<p>6/22 対「日本選抜」 「神宮のナイターに9万人」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・イギリスのプロ・サッカーチーム「スターリング・アルビオン」の来日第一戦は、二十二日午後七時十分から東京・国立競技場に約四万五千の観衆をあつめ、若手中心の「日本選抜」との間で行われた。 ・「アルビオンが快勝 ワザで日本選抜を圧倒」 ・「アルビオン」は気持ちのよいチームだった。「からだの寄せは、激しいが、肩から入るフェアなチャージだ」(読売新聞) ・プロらしい厳しさ ・「得点の連発光る アルビオン 日本選抜後半の反撃及ばず」試合開始直前になっても観衆はつめかけ、予定開始時間を十分遅らせる盛況 ・英プロ二部下位チームぐらいの実力はある。 ・アルビオンは巧妙というよりも堅実な力強いサッカーだ(朝日新聞)
<p>6月26日 日本代表との試合</p> <p>読売新聞 「メキシコ用の新作靴に期待 きょうのアルビオン戦」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「(日本)アマチュアがプロを破る金星は、必ずしも不可能ではない」 ・「長い一予と出足の早さで、日本より一歩上だ」 <p>読売新聞 「日本代表も敗れる アルビオン、後半に猛攻」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「苦しい条件の中だけにたたきこまれた基礎技術の差がはっきり出た」 ・「相手はグラウンド全体に心を働かせ、十一人が結びついたプレーをする」 <p>朝日新聞 「熱戦 力尽きた全日本 再度の同点及ばず」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・写真・マッキノンのシュートを日本小城が一度は止めたがそのはね返りをホールがシュート ・「両競技場収容人員いっぺいの約二万人のファンがつめかけ ・「スキを素早く見過さなかったアルビオンはさすがに経験を積んでいるといえよう」 	<p>アマチュア至上主義の中でプロ擁護 (牛木素吉郎の論陣)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・この試合を見た六万人余の観衆の中に「日本のサッカーがプロと対戦したので汚された」と思った人が、ひとりでもいたのだろうか。来日前、体協の中に「プロとの試合であがった収益は、スポーツ振興のためでも勝手に使うことはならん」と大声で怒号する人がいた。だが、そんな小理屈は、アルビオンのスポーツマンらしい、すばらしい試合の前にけし飛んでしまった。

裏話になりますが、スターリングの地元紙、Stirling Journal & Advertizert 誌では、東京の2試合で1万ポンドのギャラということが大きな見出しで出ています。プロですから当然お金を払っているはずなんです。ところが、日本の報道では全部無料で来たということになっています。牛木さんの説によると、日本サッカー協会はジュネーブに隠し口座を持っているから、そこから払ったのだろうということでした。口座のことをサッカー協会のどなたに聞いても「知らん」としか言ってくれません。海外での試合のためのお金を、日本ではなく海外の口座に積み立てていたらいいですね。私も人の証言以外の裏付けはないのではっきりしたことは言えませんが、どう考えても無料で来るわけではないんです。

それと、最初はシェフィールド・ウェンズデーが来る予定だったんです。ところが、シェフィールド・ウェンズデーがFAカップの決勝に出て、負けるんですけど、ご褒美でマジョルカあたりで夏休みに入り、日本へは行きたくないと。JFAは困りましたが、スターリングアルビオン側の記録では、「シェフィールドだからSの字を探せ」とJFAから頼まれたエージェントが、Sの頭文字のチームを探したら、空いていたのはスターリングアルビオンだったと。向こうの記録ではそうになっています。アテネとテヘランで試合をして来日します。彼らにとっては日本の記憶がものすごくよいわけです。素晴らしい待遇を受けたと。アサヒプリンスホテルというのは赤坂プリンスホテルだと思いますが、素晴らしいVIP待遇を受けたと書かれています。「スターリングのような小さなクラブが国際舞台で試合ができたことを大変に誇りに思う」と。

地元紙はどう伝えたのか

£10,000 GUARANTEE FOR TWO GAMES IN TOKYO
Albion Selected for Prize Tour in the Far East

スターリングの地域紙Stirling Journal& Advertizer(現在は廃刊)の見出し

「東京での二試合に一万ポンドのギャラ」

スターリングFCの「極東遠征」が報じられている。
1万から1万2千ポンドの間でギャラが支払われるとされ、日本ではフルタイムのプロとして扱われ、ギャラが支払われた。

※日本の新聞では、「交通費、滞在費以外のギャラは払わない」

訪日の経過について (記事によれば)

1965-66シーズンにおいて1部リーグ残留を決めていたスターリングは、スペインのマジョルカでの強化合宿を予定していた。日本サッカー協会はFAカップファイナリストのシェフィールド・ウェンズデー (Sheffield Wednesday) にオファーが出したが、彼らはシーズンでの疲労を考慮し日本までの長旅となるワールドツアーを辞退した。そして「同じSの頭文字を持つ」という理由でスターリングが代替チームとしてピックアップされた。

また、当初の計画では、ニュージーランド、オーストラリア、フィリピン、香港、タイでの試合も予定されたが、最終的にはアテネ、テヘランを経て日本ということになった。

そして、6月13日にロンドン、パリを經由してアテネへと出発した。

日本に到着するまで

(当時クラブの事務員にいて、インタビュー当時、経営陣の一人であるピーター・ガードナー (Peter Gardiner) の回顧)

- AEKアテネと対戦したギリシャでは良い扱いを受けなかった。現地のファンたちは、シェフィールド・Wとの試合を期待していたので、アテネの現地紙は、スコットランドリーグの下位チームとして低い評価をした。観客もわずかで、あの試合では利益はほとんど出なかっただろう。
- 試合は、AEKアテネのライバル、パナシナイコス the Nikos Goumas Stadium で行われ、試合は0-2で敗れている。
- テヘランでの試合、3万5000人の観衆の前でプレーし、1-0で勝利し、スターリングFCのプレイスタイルに現地は好意的だった。

日本での滞在について

「そのもてなしは、これ以上ないものだった。東京で最高級の“ASAKI Prince Hotel”(赤坂プリンスホテル)に宿泊し、まるでVIPのように処遇された。第2戦の試合前には選手と役員全員が高松宮夫妻に紹介され、滞在中どこにいても特別の訪問者としてもてなされた。」





VIP待遇

スターリングのような小さなクラブが国際舞台で試合ができたことを大変誇りに思う。グラスゴー空港に降り立った時、海外に行く機会があったとしても、これ以上の経験は2度とできないだろう。

(フィジカル・コーチ Hugh Allan)





当時のコーチがグラスゴー空港に降り立った時、海外に行く機会があったとしてもこれ以上の経験は二度とないだろうと言ったという話が残っています。

日本で最も人気のあるスポーツである野球との関係で訪日を記す記事もあります。2005年の回顧記事ですが、「我々が試合をした国立競技場の隣の野球場も、有名な球場で、そこでは重要な試合が行われていたが、それを上回る45,000人もの観客がサッカーを観てくれたことに満足している」と書かれています。神宮球場の巨人対ヤクルト戦ですね。

スターリングは、日本が呼んでくれたことをいまでもすごく温かい記憶として持っています。それに対して何らかのお返しができないかということ、私は10年前から言っていて、10年前にスターリングを呼びたいということで動き出しました。かなり実現に近づいたんです。ところがスポン

サー問題で大きな失敗をしました。日本のある生命保険会社にお問い合わせしたらよい返事が来たんです。スターリングアルビオンのスポンサーだったんです。1,000万円近い額が出せるということでした。けど調べていくと、その保険会社は2種類あって、日本・アメリカ系とヨーロッパ系は別会社だということがわかったんです。それでガクッときたのが10年前でした。

それから10年経って、今年が来日60年目ということです。

長くなりました。雑談ばかりでごめんなさい。以上です。

6/22 対日本選抜 (国立競技場)
2005年の回顧

- 日本で最も人気のあるスポーツである野球との関係で訪日を記憶

「我々が試合をした国立競技場の隣の野球場も、有名な球場で、そこでは重要な試合が行われていたが、それを上回る45000人もの観客がサッカーを観てくれたことに満足している。」



GREY BARI Stirling Albion FC vs Japan national football team at a stadium outside Tokyo.

改めて **Stirling Albion F.C.** の現在

- 本拠地 Forthbank Stadium (3,808人収容)
- 1993年以前はAnnfield Stadium
- 1986年 Annfieldはスコットランド初の人工芝へ
- 20世紀末はDivision1とDivision2を行き来
- 2000/1 Division3
- 2006/7 Division1
- 2008以降

実質3部と4部の行き来と低迷



第2部. FIFA ワールドカップ 2026 を語る

1. 日本代表の英国遠征

中塚：それでは第2部を始めたいと思います。16時30分には第2部も終え、隣の部屋での懇親会に移ります。この場も、後方にスコッチ・ウィスキーのデスクがあります。各自でお取りいただき、リラクセスして第2部に臨んでください。

質疑の時間を取りたいと思っていましたが、そうすると第2部で話題を用意して下さっている方が喋れなくなるので、どんどん進行していきます。

まずはスコットランドの話の続きです。黒田さんから1966年のスターリングアルビオン来日が紹介されました。今年3月のスコットランド遠征の際、JFAがスターリング・アルビオンを訪れ、60年前の交流を記念するセレモニーが行われました。朝日新聞の照屋健さん、筑波大学蹴球部の

後輩ですが、彼が取材に訪れ、記事にまとめていました。今日はこの場で彼に話題提供してもらおうつもりでしたが、あいにくJリーグの取材と重なり来られません。このシンポジウム用に、写真とコメントを用意してくれたのでご一読ください (p. 26~27)。

ちなみに3月末の英国遠征を現地で観戦された方はどれくらいいらっしゃいますか？ ありがとうございます。6名ほどおられます。オンライン側でもいらっしゃるかもしれません。

その中からまず、「サッカー講師」を自称され、河北新報等にいろんな記事を書かれている武藤文雄さんが、スコットランド遠征記ということでスライドを用意して話題提供して下さいます。よろしく願います。

日本サッカー協会のスターリング・アルビオンFC訪問について

朝日新聞東京スポーツ部 照屋 健

サッカー日本代表がイングランドから歴史的な勝利を挙げた3月の英国遠征で、日本と英国の結びつきを物語るイベントがささやかに行われていた。3月24日、スコットランドの古都スターリング。現在はスコットランド4部に当たるスターリング・アルビオンFCのクラブハウスを、日本サッカー協会（JFA）の山本昌邦・技術委員長らが訪れた。



両者の縁は60年前にさかのぼる。日本がスターリング・アルビオンFCと対戦したのは、1966年。JFAによると、サッカーの母国との対戦は「念願」だったという。スターリングは当時のスコットランド1部で、英国のプロチームが来るのは初。当時の機関

誌には、「いつの日か、サッカーの母国英国から、アマよりひときわ高い水準にあるプロ・サッカー・チームを招いて、その力を紹介し、併せてわれわれの技能をためしたい念願を持っていた」という一文があった。第1戦、6月22日、国立競技場での対戦は1-3、6月26日、駒沢競技場での第2戦は2-4でいずれも敗戦。釜本邦茂、杉山隆一、横山謙三ら2年後の1968年メキシコ五輪で銅メダルに輝くメンバーが出場し、格好の腕試しの相手となったようだった。

スターリングのクラブハウスで行われた式典では、参加した我々報道陣にも、クラブと日本のこうした歴史が紹介された。当時19歳で、スターリングの最年少選手だったという79歳のジョン・オールさんも出席。プロ選手がいなかった当時の日本の印象について「技術的な部分は欠けていたけど、速さがあって身体能力が高く、苦しめられた」と語っていた。当時はまだ、飛行機での移動が珍しかったことや、銀座で寿司を食べるなどおもてなしをうけたことも紹介された。

■スコットランド遠征記 (武藤文雄)

先ほど中塚先生の話でもありましたが、去年12月、シンポジウム「賀川浩さんを語ろう」に出て、久しぶりに黒田先生にご挨拶できました。そのころイングランド戦は決まっていたのですがスコットランド戦はまだです。「スコットランドとやる噂があるから行かない？」と軽く誘われたものです。

おかげさまで、黒田先生という世界一のスコットランド・ツアーコンダクターに、私ども夫婦で6日間もご一緒させていただきました。今日は黒田先生のお弟子さん筋の方もいらっしゃると思います。皆さん関西大学にお金を払って先生の授業やゼミを受けられたと思います。私ども夫婦は全く無料で6日間、黒田先生の社会学講義を受けることができたという素晴らしい旅行でした(笑)。

グレンゴーでは本当に綺麗な景色を堪能できました。こちらがオーバンという港町です。エジンバラを東京と考えます

と、先ほどから話題が出ているスターリングが鎌倉、グレンコーが箱根、オーバンが沼津だと、いい加減なことを酔っ払って言っていたら、「そういう見立てをするのが社会的には正しい」と先生に褒めていただきました(笑)。

黒田先生の受け売りですが、グラスゴーの人口は60万人です。ハンプデンパークはスコットランド代表のスタジアムで5万人収容。試合前



表ユニホームが手渡され、スターリング側からは両者のロゴが入ったペナントや地元産のウイスキーなどが記念に贈られた。

今の世界ランキングは日本が18位に対し、スコットランドが43位。3月の遠征でも、日本が1-0で下すなど、サッカーの実力や技術面でいえば、日本も上回れるレベルにきたのかもしれない。ただ、現地を訪れて感じたのは、スポーツ文化の豊かさや伝統を大切にするリスペクトの精神だ。4部のクラブであっても、天然芝のグラウンドにクラブハウスが併設され、「club historian」(歴史担当)という肩書きをもつスタッフが過去の資料をもとに、丁寧に説明してくれた。日本代表やJリーグクラブも、数々の試合をしてきたが、こうした関係性を大切にしているクラブがどれほどあるだろうか。取材後、クラブハウスの一室に招かれ、サンドイッチやコーヒーをふるまわれた。W杯北中米大会に向かう日本にとって、温かみのある、小さな歓迎会だった。



武藤の2026年3月スコットランド遠征での学び

- ・スコットランド遠征のきっかけ
サロン2002で黒田先生(世界一のスコットランドツアーコンダクター)に誘われた
- ・グラスゴーにて
人口60万人の都市に3つの大競技場
- ・フットボール発祥の2ネーションが日本に負けた意味
英国の世界への文化浸透

にセルティックパークに行ってきましたが、ここが6万人収容です。もう一つ、レンジャーズのアイブロックスパークには行きませんでした。4万人収容。人口60万人の都市に、毎試合数万人集めるスタジアムが二つあり、さらに代表のスタジアムがある。人口60万というと、日本だと熊本、相模原、岡山、静岡...、こんな感じの街です。我々もがんばればグラスゴーみたいにサッカーが盛んな街を作れるのじゃないのか。もっともっとJリーグは発展できるのじゃないかということ、グラスゴーという街を見てまず体感しました。

私はベガルタ仙台のサポーターですが、サポーター仲間がこの話をしたところ、仙台には楽天イーグルスがあって仙台89ersがあってベガルタ仙台がある。全部のチームがもっともって人気を集めて友達を増やせるはずだと盛り上がりました。それが意味、スコットランド戦以上にグラスゴーと言う街で感じたことです。

イングランド、スコットランドと試合をやって、勝てたわけですが、先ほど黒田先生のスライドにも、フォース橋とかニューラナークとか、産業革命時のいろんなインフラストラクチャーが紹介されました。また大英博物館に行くと、今度は世界中の富を、英国という国が、はっきり言えば篡奪、盗んできているわけなんですけど、改めて英国と言うのはすごい国だなと思いました。しかし、英国が発明して世界にもっとも広がったものは何かというと、フットボールだと思います。世界中の人がフットボールを楽しんでいるわけですから。

一方、英国と日本はかなり遠い国だと思います。例えば世界中に、英語を母語としている国が無数にありますが、あれはみな英国の植民地から始まっているわけです。様々なかたちで英国と接点を持つ国が多いのに、日本ほど英国との直接的な接点がない国は珍しいのじゃないかと思います。

スコットランド遠征のきっかけ

25年12月21日 サロン2002公開シンポジウム「賀川浩さんを語ろう」で、黒田先生と再会
イングランド戦の前に「スコットランド」と試合する噂あり、「一緒に行かないか？」
世界一のスコットランドツアーコンダクターの下、老夫婦のスコットランド旅行
イングランドを含め、6日間、社会学の講義を受けながら、スコットランドを中心に英国の魅力を満喫した



グラスゴーにて

人口60万人のグラスゴーには3つの大競技場がある
ハンペンパーク (1873年設立、5万人：スコットランド代表)
セルティックパーク (1892年設立、6万人：セルティック)
アイブロックスパーク (1899年設立、4万人：レンジャーズ) 行っていませんが
映像で幾度もセルティックパークのファン熱狂を見てきたが
数万人のスタジアムが隔週ごとに満員となる。
→ Jリーグでも粘り強く集客を継続すれば
熊本、相模原、岡山、静岡、船橋、川口、鹿児島、八王子、姫路クラスの
都市でもやれるはず。
ベガルタサポーターにこの話をしたら、
「野球とバスケットと並立しながら数万人規模の観客を集めよう」と大いに盛り上がった。



フットボール発祥の2ネーションが日本に負けた意味

私にとって初めてのゆっくりした英国観光
大英博物館、世界中の富、遺跡の篡奪ぶり
産業革命時のインフラ (フォース橋、ニューラナーク、エジンバラ市の
ニュータウン、ロンドン地下鉄)
英国が発明し、世界に最も拡散が成功したものを考えたい。

そういう国が、スコットランドとイングランドをやっつけた。これは言い方を変えると、英国人が発明したフットボールという、おそらく人類が発明した最大の文化、ソフトウェアが、完全に世界中に広がったということを示しているのではないかと思います。

そういう意味で、今回、スコットランドとイングランドが日本に負けたというのは、1700年ぐらいに始まった大英帝国の世界制覇が完全に成功したということです。その2026年3月に、その場にいられたことを、私は幸せに思っております！

以上です。あとついでですが、いまJリーグの試合をやっていますが、できたらこの後の飲んでる時に、結果を言わないでください。明日シラフになってから見るのを楽しみにしていますので。

どうもありがとうございました。

お願い

本日のセミナー、懇親会時、今日のJリーグの結果、内容は一切私には言わないでください。明日シラフになってからDAZN見るのを楽しみにしていますので(笑)

中塚：ありがとうございます。最後のスライド重要ですね。Jリーグだけじゃなくて、関東・関西の学生リーグもちょうどいまやっているところです。

ではここまでのところ、第1部の発表と、いまの英国旅行記も含め、皆さんのほうからご質問なり感想や補足なりがあれば、オンラインの方も含めていかがでしょうか。

守屋：では私から一つ。現地ではすべて「ハムデンパーク」でした。プを言いません。僕もずっとハンプデンパークと思ってましたけど。

それからもう一つ。負けてもスコットランドのサポが怒らなかった。日本に負けるなら仕方ないっていう感じでした。

中塚：130年で我々はそこまでたどり着いたということですかね。どうでしょうか、後藤さん。

後藤：武藤さんが、日本は英国と接点がないとおっしゃったけど、そんなことないんじゃないかなと思いました。まさに日本のサッカーの始まりでは、先ほど言ったようにイギリスのダグラスさんやヘンリー・ダイアアあたりが来ているし、何とんでも英国大使館の書記官補だったウィリアム・ヘーグさん。FAの規約からルールからリーグ戦のやり方まで全部教えてくれて、しかも日本協会設立のきっかけになったFAカップ寄贈のきっかけを作ってくれました。当時の日英同盟の重要さと、日本があるころ日英同盟からちょっと外れてくるのを引き止めようとして、イングランドの外務省が必死になってあのカップの寄贈をFAに働きかけてくれたとか、日本のサッカーもイギリスに丸ごとお世話になってたんでね。関係ないことはないんじゃないかな。

武藤：サッカーに関してはそうかもしれませんが、例えば、あまり大きな声で言えませんが、英国が世界中で、いまの常識から言ったらとてもじゃないけど褒められないことをたくさんしてきたわけですよね。例えば中国は、英国から相当なダメージを食らっています。けれども、そういうような残念な関係がない。というようなことを、英国と日本の接点がなかったと言ったものです。日英同盟については考えませんでしたね。当時まだ生きてなかった…。後藤さんとの世代の違いが(笑)。

黒田：私は先祖が薩摩なので、薩英戦争で結構やられています。でも薩摩の間は、薩英戦争でイギリスを恨んではいないですね。それで目が覚めたという感じがあります。それともう一つ、さっきの「ハムデン」ですけど、スコットランド人もね、実はPを発音してるんです。けど母音がないので、日本人には「ハムデン」に聞こえるということですね。

中塚：私も中学生の頃から賀川さんや牛木さんや、あるいは後藤さんの記事で育ってきた者ですが（後藤：一緒にしないでよ(笑)）、私の記憶では、ハンプデンパークという「15万人も入るスタジアムがある」というのがサッカーマガジンに書かれていたと思うんですが、どうですか。

後藤：13万何千人というのが最高ですよ。1950年代はほんと立ち見で詰め込みましたから。どこのスタジアムでも信じられないぐらいの記録が残ってますけど、本当に世界最大のスタジアムでした。

小野：日本のすごいところは、薩摩って、負けてすぐに薩摩チューデントとして勉強に行く。負けた相手のところに留学生を送ったというのもすごいなと思いました。

質問ですけど、チャー・ディンさんのご遺族とか子孫の方の消息はわかってるんでしょうか。



後藤：2007年だったかな。チャー・ディンがサッカー殿堂に掲額された時に、JFAが現地の新聞に「知っている人がいたら名乗り出てくれ」と広告を出したんだけど、一切反響がなかった。これにはいろいろな理由があります。僕も一回現地に行って、向こうでサッカーの仕事をしている人に聞いてみたんだけどわからない。いくつか理由があって、一つは軍政時代に昔の記録がほとんど消されてしまい、国立図書館に行っても、その頃の新聞はないんじゃないかと言われ、それぐらい昔の記憶が消されてしまった。それからチャー・ディンという名前ですが、あれで一つの名前なんです。要するにファミリーネームがないんです。日本や中国の儒教社会だと先祖を大事にするし、韓国や中国では十何代前まで遡れる。本当じゃないにしてもそういうのがあるんだけど、ミャンマーにはないんです。「ビルマの竖琴」という、日本人が遺骨収集する映画がありましたけど、ビルマ人は、日本人が何で骨を探しに来るのか全然理解してもらえない。そういう国ですから。家族のつながりみたいなものもない。これも一つの理由だと思います。

ただ、戦後は非常に活躍した人なのに残っていないというのが、僕らの目から見ると不思議ですね。けど本当にはないんです。僕も随分一所懸命調べたんですけど。

黒田：ちょっと補足しますとね、そのあとに関西大学でビルマ、ミャンマーの記者を呼んだことがあるんです。その時にチャー・ディンの話をすると彼はすごく関心を示して、私の力で探しますって言ったんです。けどここからが悲劇なんです。探してますよという連絡の後、例のクーデターで彼自身とも連絡が取れないんです。そこの新聞社にもいないんです。なかなか大変です、ということがありました。

中塚：ありがとうございます。チャー・ディンの話を続けると、私が長らく勤めていた筑波大附属高校、もとの東京高師附属中のサッカー部誌にも、チャー・ディンさんに教わったという記録がありま

す。先ほど少し紹介しました。もう少し補足すると、留学生で来ていたのはチャー・ディンだけでなく、モン・エフ・ペーさんとモン・モンさん。ビルマの留学生は3人いて、みな一緒に遊んでくれたと。附属の子たちは長身のチャー・ディンさんよりもエフ・ペーさんと仲良くなってサッカーのプレーを教わったという記事もあります。もしかするとそちらの方から何か掴めるかもしれないなと思いましたがどうですか。

後藤：消息の話はわかりませんが、3人いて、3人がそれぞれコーチする時に得意・不得意があって、役割分担をしっかりとやっていましたよね。

チャー・ディンという名前ですけど、KYA って書いてあるのですがあれでなんでチャーって読むのかという話。サッカーとは関係ない話ですが、チャーっていうのは日本語だとタ行の口蓋音ですね。口蓋音っていうのは、舌を上の方の口蓋につけることで、Kもやっぱり口蓋化するとチャーになるんです。口の中でやってみるとわかります。ビルマ語を私は少しやったことあるんですけど、口蓋化する記号というのがあって、確かにKにその記号をつけるとチャーになるんです。

黒田：いま私、スコッチ・ウイスキーのおかわり頼みました。皆様おかわりどうぞ自由に（笑）

先ほどの話で、スコットランド人が世界にたくさん出ていったという話なんです。これは非常に重要な、スコットランド関係者では重要な話なんです。戦争とも関わりがあります。イングランドから恩恵は受けたけど、やっぱり差別はされていたんですね。優秀な人たちはロンドン中心へ行くけど、そっちへ行くよりは海外へという意識が、19世紀から20世紀にかけてスコットランド人には多かったんです。その結果として、日本でもミャンマーでも、お雇い外国人で来た人の多くがスコットランド人なんですね。

そういうことに加えて戦争の時です。日本の軍隊とも似ていますが、日本の場合、沖縄や鹿児島師団が最前線に行かされる率が非常に高く、死亡率も高かったんですが、同じようにスコットランドレジメンタル、スコットランド軍が最前線というのが多いんです。暗黙の差別じゃないかってスコットランド人は言いますが、その結果、よく映画にもバグパイプが戦場に出てきてイギリス軍として描かれますが、あれはスコットランド兵なんです。という具合に、やっぱり海外へ行ったり、行かされたということが多かったわけです。

後藤：例えばインド植民地でも、カルカッタの本庁はイングランド人が多くて、ミャンマー、ビルマの方はラングーンに行かされるのがスコットランド人という関係だった。これは想像ですけど。

黒田：多分そうですね。なるほどね。

中塚：ありがとうございます。こういう話をしていると終わらないですね（笑）。

そろそろ次のテーマにも移りたいのですが、復習も含めて、お手元の資料の2枚目の年表をご覧ください。スコットランドと日本の、FIFAワールドカップ本大会での試合結果です。

一目瞭然ですね。スコットランドは古くからのワールドカップの常連で、日本にとってのワールドカップは夢のまた夢でした。1998年大会で両方とも出場したんですが、我々はそのから連続出場、そしていよいよ今大会では「優勝」を言えるぐらい、まあ少し笑いが出ちゃうのでまだまだでしょうけど、スコットランド人が日本に負けても怒らなくなるぐらいリスペクトしてもらえるところまで来たわけです。

そんなわけで、今回のワールドカップの展望も含め、雑談を続けていきたいと思います。

FIFAワールドカップ本大会成績（スコットランドと日本）

2026.5.2. (中塚義実)									
大会概要				スコットランド			日本		
開催年	開催国		出場国	試合日	スコア	対戦国	試合日	スコア	対戦国
1930	ウルグアイ	7/13~7/30	13		不参加			不参加	
1934	イタリア	5/27~6/10	16		不参加			不参加	
1938	フランス	6/4~6/19			不参加			棄権	
1950	ブラジル	6/24~7/16			出場辞退			不参加	
1954	スイス	6/16~7/4	16	6月16日	●0-1	オーストリア		予選敗退	
				6月19日	●0-7	ウルグアイ			
1958	スウェーデン	6/8~6/29	16	6月8日	△1-1	ユーゴスラビア		不参加	
				6月11日	●2-3	パラグアイ			
				6月15日	●1-2	フランス			
1962	チリ	5/30~6/17	16		予選敗退			予選敗退	
1966	イングランド	7/11~7/30	16		予選敗退			不参加	
1970	メキシコ	5/31~6/21	16		予選敗退			予選敗退	
1974	西ドイツ	6/13~7/7	16	6月14日	○2-0	ザイール		予選敗退	
				6月18日	△0-0	ブラジル			
				6月22日	△1-1	ユーゴスラビア			
1978	アルゼンチン	6/1~6/25	16	6月3日	●1-3	ペルー		予選敗退	
				6月7日	△1-1	イラン			
				6月11日	○3-2	オランダ			
1982	スペイン	6/13~7/11	24	6月15日	○5-2	ニュージーランド		予選敗退	
				6月18日	●1-4	ブラジル			
				6月22日	△2-2	ソ連			
1986	メキシコ	6/1~6/29	24	6月4日	●0-1	デンマーク		予選敗退	
				6月8日	●1-2	西ドイツ			
				6月13日	△0-0	ウルグアイ			
1990	イタリア	6/8~7/8	24	6月11日	●1-2	コスタリカ		予選敗退	
				6月16日	○2-1	スウェーデン			
				6月20日	●1-2	ブラジル			
1994	アメリカ	6/17~7/17	24		予選敗退			予選敗退	
1998	フランス	6/10~7/12	32	6月10日	●1-2	ブラジル	6月14日	●0-1	アルゼンチン
				6月16日	△1-1	ノルウェー	6月20日	●0-1	クロアチア
				6月23日	●0-3	モロッコ	6月26日	●1-2	ジャマイカ
2002	韓国・日本	5/31~6/30	32		予選敗退		6月4日	△2-2	ベルギー
							6月9日	○1-0	ロシア
							6月14日	○2-0	チュニジア
							6月18日	●0-1	トルコ
2006	ドイツ	6/9~7/9	32		予選敗退		6月12日	●1-3	オーストラリア
							6月18日	△0-0	クロアチア
							6月22日	●1-4	ブラジル
2010	南アフリカ	6/11~7/11	32		予選敗退		6月14日	○1-0	カメルーン
							6月19日	●0-1	オランダ
							6月24日	○3-1	デンマーク
							6月29日	▲0-0(PK3-5)	パラグアイ
2014	ブラジル	6/12~7/13	32		予選敗退		6月15日	●1-2	コートジボワール
							6月20日	△0-0	ギリシャ
							6月25日	●1-4	コロンビア
2018	ロシア	6/14~7/15	32		予選敗退		6月19日	○1-0	コロンビア
							6月24日	△2-2	セネガル
							6月28日	●0-1	ポーランド
							7月2日	●2-3(延長)	ベルギー
2022	カタール	11/20~12/18	32		予選敗退		11月23日	○2-1	ドイツ
							11月27日	●0-1	コスタリカ
							12月1日	○2-1	スペイン
							12月5日	▲1-1(PK1-3)	クロアチア
2026	アメリカ・カナダ・メキシコ	6/11~7/19	48	6月13日		ハイチ	6月14日		オランダ
				6月19日	グループC	モロッコ	6月20日	グループF	チュニジア
				6月24日		ブラジル	6月25日		スウェーデン
				6/29or30	R32		6/29.30.7/1.2	R32	
				7/4~7	R16		7/4~7	R16	
				7/9~11	32準々決勝		7/9~11	準々決勝	
				7/14or15	準決勝		7/14or15	準決勝	
				7月19日	決勝		7月19日	決勝	

2. FIFA ワールドカップ 2026 への期待と展望

中塚：「期待と展望」の話題提供者として、オンラインで参加の小島裕範さんをお願いしています。

小島さんは、事業再生コンサルタントの仕事を大阪・京都でされています。筑波大学時代の後輩で、私はサッカー部で彼は同好会でしたが、大学院時代にやっていた地域のクラブで一緒にボールを蹴っていた仲間です。彼は学生時代にワールドカップに行きます。1986年メキシコ大会です。今回、彼がチュニジア戦のチケットを持ってるからということで「中塚さん、行きませんか」と声をかけてくれて、一緒にメキシコに行くことにしています。

その彼が、とっておきの話を用意してオンラインで構えてくれています。

話のタイトルは、「世界の時間を二度止めた男」です。

小島さん、こんな紹介でいいですか。ではよろしくお願いします。

■世界の時間を二度止めた男（小島裕範）

皆さんこんにちは。サロン 2002 会員の小島と申します。いまご紹介にあつた通り、中塚さんとは大学時代からの知り合いで、40年以上の付き合いになります。今日はそのあたりの昔話をさせていただきますので、お付き合いいただければと思います。

1986年6月のメキシコワールドカップ。当時私は筑波大の4年生で、中塚さんは確か大学院生だったと思います。大学4年生の6月というと、当時は就職活動とか教育実習で忙しい時期でした。いまは変わってきたようですけど。私は教育実習を蹴飛ばしてワールドカップ観戦ツアーに参加し、21日間で11試合を観戦しました。一緒に行った方々の中には、後藤さんが関わっておられた「日本サッカー狂会」のメンバーの方が新婚旅行で来られて、一緒に行かせていただいたところです。

11試合見た中には、マラドーナの神の手ゴールや5人抜きがあった試合や、あるいは決勝戦もスタジアムで観戦しました。しかし中でも忘れられないのが準々決勝のブラジル対フランス戦です。グアダラハラのはりスコスタジアムです。プラティニ、ジレス、ティガナ、アモロス、ストピラ、ジーコ、ソクラテス、カレッカ、ジュニオール、ミューレルと、本当に豪華なメンバーで、ワールドカップ史上に残る名勝負でした。その試合を見に行きました。ブラジル側のゴール裏にいたんです。

前半43分だったと思います。フランスのルイス・フェルナンデス。スペイン系のボールハンターって言うんですか、最近あまり言わなくなりましたが、中盤のダイナモみたいな選手がいて、彼がロングシュートを放つわけです。しかし大きく右に外れます。蹴った瞬間に外れたとわかるような、どうしようもない、スタンドからもブーイングが送られるようなシュートでした。これがゴール裏にいた私の前で大きくバウンドし、ゆるゆると私の手の中になぜか収まってしまいました。ワールドカップ公式球キックです。当時はマルチボールシステムがありませんので、私がボールを持っていると試合が再開できない。そこで私はとりあえずボールを頭上に高く掲げて、「取ったぞ！」というところを周りにアピールして、ボールをすぐにピッチに返したんです。一緒に行っていた仲間から、「何でそんなに早く返しちゃったの。写真撮れなかったじゃん。撮ってあげたのに」と随分言われました。確かにそうです。まあ、これは二度とないことだろうから、このボールの感触を忘れないようにしようと思ったことを覚えております。

ところがですね、2度目があつたんです。延長後半の終了間際。またもルイス・フェルナンデスが、左から来た横パスをわざとトラップでボールを浮かせてトラップして、ボールの下をすくうようにして放ったロングシュート。これがややアウトフロントにかかって、やっぱり大きな弧を描いて観客席へ飛び込んできました。そこにもまた私がいました。その試合の観客数は6万5000人とされていますが、そこでボールを2回キックした。

先日、その確率をAIに計算してもらいました。「約1000万分の1でしょう」とAIは答えてくれました。「年末ジャンボの2等の当選と同じぐらいです。ガリガリ君の当たり棒を3回連続で引くより

は難しいでしょう」とというような回答でした。イメージが湧いたのか湧かなかったのかよくわからないような回答でしたけど。

それから 10 年ほど経ちまして、1990 年代の半ば頃、ある人物と知り合いました、当時彼が国立競技場で試合のたびに配っていたサポテスタという手書きの原稿をコピーしてきたミニコミ誌みたいなものを配っていたんですが、そこでこの話を取り上げてくれました。

その時に彼がつけた原稿のタイトルが、さっき中塚さんがおっしゃった「世界の時間を二度止めた男」でした。確かに、私がボールを持っている間は試合は止まり、世界中がそれを待っていたわけですね。

実はハリスコスタジアムで世界の時間を止めている時、私の頭の中では日本でのテレビ実況が鳴り響いていました。もちろん妄想です。金子勝彦さんの声が私の頭の中では鳴り、聞こえます。

「あれ、ボールを持ってるのは日本人ですね」

すると隣で岡野俊一郎さんの声がします。

「いかんですね、早く返さないよ。世界に恥ずかしくないんですかね」

まああのお二人からそんなふうに言われちゃうと、これはさっさとボールをピッチに返さないといかんということで、ボールを返したんですけども。

実際には、世界中が待ってたというよりは、ピッチ上の 22 人が「はよボール返さんかい」と思っていたんじゃないかなと思います。

先ほどお話にあったように、来月中塚さんと、私にとっては 40 年ぶりのメキシコへ行き、アステカとモンテレイでそれぞれ試合を見ます。スタンドにいる時に、もしまたボールが飛んできたら、今度は写真を撮ってからちゃんと返したいと思いますので、その時は中塚さん、ぜひ写真撮影の方よろしくお願いいたします。

以上でございました。ありがとうございました。

中塚：その時は私がキャッチするので、小島さん、写真をお願いします（笑）。

後藤：1000 万分の 1 という確率ですが、2 回ともルイス・フェルナンデスのシュートだったという点を加味したら、はるかに確率が高いんじゃないですかね。何億回に 1 回になるんじゃないですか。

黒田：山本浩さんに、この話のあとでお聞きしようと思っていたんですけど山本さんは帰られてしまいました。その試合の担当ではなかったみたいですけどね。86 年のメキシコ大会は、山本さんにとってのデビュー戦で、あの有名な「マラドーナ、マラドーナ」の中継があった時なんです。小島さんの話をご存知だったかを聞いたかったですね。

中塚：知る人ぞ知る、とっておきの話ですね。86 年メキシコ大会は筑波の安アパートでテレビを見ていました。ブラジルとフランスの試合は事実上の決勝と言っているぐらいの、あるいは古典的なフツ



トボールの最後の集大成みたいなゲームで、私もすごく覚えています。フェルナンデスのシュートがテレビ画面の右から左に、ゴールを大きく外れてゴール裏に飛び込んだシーンもよく覚えています。

ワールドカップ後に、小島君の帰国報告会をやるとうことで、私のアパートの部屋で飲みながらやりました。「すごいことしてもうたんですわ」と言って小島さんが語ったのがこの話です。まさかテレビ画面から消えていったあのボールを、二度にわたってキャッチしたとは。いろんなところで語り継いでいきたいエピソードだなと思って、今回話題提供者としてお願いした次第です。

【補足】オンライン参加の高平豊明氏から下記情報が提供されました。転載本人了解済です。
「NHKの山本アナがシンポジウムに参加されていたのに早めに退出されたのは残念でした。といたしますのも、この試合も山本、岡野コンビによる実況だったからです。ちなみに映像では、ルイス・フェルナンデスのボールの行先を追ってくれず、すぐフェルナンデス本人を捉えていましたから、山本さんに聞いても、小島さんの場面は見えていないかも知れませんね。高平豊明」

中塚：いきなりですが、鈴木崇正さん。インターネットのメディアでこの話を一度取り上げてもらったことがあると記憶していますが。

鈴木：そのお話は取り上げてないですが、以前、日本代表コーチだった小野剛さんのインタビュー記事の原稿を小島さんをお願いした際に、筆者紹介にそのエピソードが記されていました。小島さんには、その節はたいへんお世話になりました。

せっかく中塚さんに話を振ってもらったので、その流れでひとつお聞きしてよろしいでしょうか。

私はサロン 2002 の古くからの会員として、中塚さんと同い年です。今日の配布資料の中で、このスコットランドと日本のワールドカップ本大会の戦績の資料は、最近の中塚さんの資料の中でも一番いいですね(笑)。資料的価値が高いです。

今日、特に黒田さんにお伺いしたかったのは、スコットランド、あるいはスコットランド FA の「ワールドカップ観」についてです。我々の世代ですと、若い頃、ホームインターナショナル、正式名称は「ブリティッシュホームチャンピオンシップ」ですが、英国4協会の対抗大会が有名でした。1884年に始まって1984年に終わった、ちょうど100年続いた由緒ある大会でした。我々が若かったころの常識は、このホームインターナショナルをはじめとして、スコットランドはワールドカップに出るよりもイングランドに勝つことの方が重要なチームだということでした。今日、中塚さんが示していただいた資料を見て、改めてお尋ねしたいと思いました。スコットランドにとってワールドカップはどれほど重要なのか、お伺いできればと思います。

黒田：私がスコットランドを代表して喋るわけにいかないんですけど、いまおっしゃった通り、例えば1979年のホームインターナショナルでウェンブレイでサポーターたちが大暴動を起こします。この時は非難轟々。その後さまざな改革が行われるんです。でも私の知る限り、というか知り合いの限りで言うと、ワールドカップよりも、イングランドに勝てばOKでしたね。

ただいまは、これも私の業界話になりますが、メディアの影響も大きく、スコットランド自体がワールドカップに出なければ、みたいな感覚がこの30年ぐらいで強まってますね。一つだけエピソードを言うと、2002年はプレーオフでベルギーに負けたんです。もしベルギーに勝っていたら、日本の初戦は日本対スコットランドになるはずだったんです。でもあの時、スコットランド人の知り合いは、それほど悔しさは持ってなかったですね。イングランドと同グループのアルゼンチンとカメルーンを非常に応援していたスコットランド人がいたぐらいの感覚でしたけど(笑)。

さすがにこれだけ出ないと、今回の喜びようはすごいですよ。ということだったと思います。

鈴木：スコットランドからすれば、ライバルのイングランドがワールドカップで活躍をしていることに
対して強く意識するという事は、あったんでしょうか？

黒田：それは後藤さんどうですか。イングランドが活躍したから、スコットランドもワールドカップ
に行こうかどうかという感覚は、ちょっと私も、どっちでしょうね。

後藤：イングランドが活躍したかどうかというのは難しいですね。イングランドはワールドカップで
1966年以降は結果を出せていませんし。出場はするけどね。イタリア大会が華だったかなって感じて
すね。韓国に対して我々は同じような気持ちがありますね。日本が負けても韓国が先に負けてくれれ
ばひと安心というのはすごくよくわかるし。

昔ワールドユースがオランダであった時に、決勝がアルゼンチン対どこだったかな、ナイジェリア
かな。それから3位決定戦がブラジル対どこかで、3位決定戦を終えた選手がみんなスタンドにいて、
アルゼンチンとの決勝戦を見ていたら、みんなでナイジェリアを応援してる（笑）。

ナショナリズムって、これが本当の姿だなと思うんですよ。ただ韓国相手だと、日本人がそうい
うことすると、なんか韓国のことを応援しなきゃいけないみたいな、変な…。というトランプが言
ってるようなことに近づいちゃうんで嫌なんだけど（笑）

でもそういう日本人が韓国の悪口を平気で言えるような関係に、日韓関係がなってくれるといいな
と思ってるんでね。だからイングランドへのスコットランドって、多分その究極の姿なんじゃない
かなと思いますね。

中塚：この表でスコットランドの最初のところを見てもらうと、1930年から三大会は不参加となっ
ています。英国四協会は戦前の大会には参加すらしていません。ワールドカップというものを、自分た
ちとは違う、別の奴らが勝手にやっている大会ぐらいに思ってたんでしょう。

いよいよエントリーするのが1950年ですが、この大会でスコットランドは出場を辞退しています。
この大会、ホームインターナショナルが予選を兼ねていて、4か国のうち上位2か国が出場権を得るこ
とになっていました。1位がイングランドで2位がスコットランド。スコットランドも出場権はあった
んだけど、2位で出るのは嫌だといって辞退したということです。1位で出たイングランドは、ワール
ドカップ初出場でしたが、アメリカに対して0-1で負けるという、ワールドカップ史上に残る番狂わ
せとなるわけです。英国の姿ですね。

黒田：いまのエピソードが一番良かったです（笑）。それがそうです。一番わかりやすい。

中塚：ということで、そろそろお開きの時間です。隣の懇親会場の準備も整ってきたかな。まだまだ
この場でも続けたいんですが、部屋を変えて次に移りましょう。情報交換の続きと、初めての方もい
らっしゃると思うので交流を深めてもらい、我々のワールドカップに備えたいと思います。

守屋：今回の大会で、1次ラウンドで頑張ると、Cグループですからスコットランドと当たりますね。

中塚：Cグループのスコットランドはブラジル、モロッコ、ハイチと一緒にです。最後にスコットランド
が出場した1998年も、ブラジル、モロッコと一緒にだったんですよ。あとはノルウェーかな。ブラジ

ルとはよく当たるんですね。ラウンド32でブラジルやモロッコと当たると大変なので、スコットランドを応援して、試合ができることを願いましょう。

ということで、この場はこれにて終了です。どうもありがとうございました。

せっかくなので集合写真を1枚撮りましょう。サロンの横断幕をバックにして。

オンラインの皆さん、どうもありがとうございました。ほとんど振ることができませんでした。すみません。一番遠いのは台湾から参加の笹原さんかな。ありがとうございました。

以上（懇親会に続く）

